

哀悼抜歯

アジア・アメリカ・ポリネシアをつなぐ習俗

The Tooth Extraction for Mourning:
Custom Connecting Asia, North America and Polynesia

春成秀爾

はじめに

- ①世界の抜歯概観
- ②I¹/I₂様式の抜歯
- ③哀悼抜歯の意義

おわりに

[論文要旨]

哀悼傷身の習俗の一つに抜歯がある。この抜歯は18～19世紀のハワイ諸島の例が有名である。抜く歯は上下の中・側切歯であって、首長や親族の死にさいして極度の哀悼の意をあらわすために1回に2本を抜く。文献記録では、16～18世紀の中国の四川省や貴州省に住んでいた僮僇の例がもっとも古い。しかし、考古資料では、徳島県内谷石棺墓の男性人骨に伴った女性の上顎中切歯1本が哀悼抜歯の存在をしめしており、4世紀までさかのぼる。

中国新石器時代の抜歯は、7000年前に上顎の側切歯を抜くことから始まる。抜歯の年齢・普及率からすると、成人式とかかわりをもつと考えるとよい。中国では4500年前になると、この習俗はいったん衰退する。まもなく今度は上下の中・側切歯を抜くことが安徽・江蘇・山東付近で始まる。抜歯の年齢はあがり、その頻度は低くなる。新たに始まったこの抜歯は死者に対する哀悼のためであった、と私は推定する。

上下の中・側切歯を抜いた例は、モンゴル（～19世紀?）、シベリア（新石器～19世紀?）、アメリカ（15世紀以前～19世紀?）、日本（縄文前期～6世紀=古墳時代）、琉球（縄文～13世紀）、ポリネシア（18～19世紀）で知られている。中国新石器時代に発祥した哀悼抜歯が数千年かけてアジア・アメリカ・太平洋にひろがっていったことを、これらの事実は示唆している。

ポリネシア・シベリア・モンゴルでは、髪を切り身体を刀で傷つける哀悼傷身は、首長や親族との特別に親密な関係を表現し更新する役割を果たしている。考古資料にのこされている哀悼抜歯の痕跡は、墓の内容、男女の別などを考慮することによって、抜歯された人物の社会的な位置を探り、さらにはその社会の構造を解明していく手がかりとなる可能性を秘めている。

はじめに

人の健康な歯を抜く習俗は、アフリカ、アジア、アメリカ、ポリネシアでもっとも発達した。

金関丈夫はかつて、世界の抜歯を概観して、「近親者の死に際して服喪の一形式」として行なうものと、「男女の成年式の一行事、あるいは結果的に見て一種の試練」として行なうものとの二つの場合に大別した。そして、前者はポリネシアを中心とし、一生のうちに何度も経験しなければならないのに対して、オーストラリア、メラネシア、インドネシア、中国、日本、東部シベリア、アリューシャンからアメリカ大陸にわたる環太平洋地域の多くは後者であって、一生一度の行事である、とする。さらに、「これらの二つの異なった場合をもつ風習が、別個に起ったとは考えにくい。根元は一つだったにちがいない」と予想する。中国の西南部の人たちが古くは成年式の意味で抜歯していたのに、後に服喪の一形式になっていることから、「両者の関連は疑い得ない」。「恐るべき祖霊は、死の直後だけでなく成年式など子孫の一生の重要な行事には必ず出席するので、生きた人たちは、ひとしく死霊に対して身をかかすカムフラージュが必要で、その手段が抜歯だった」、というのが金関の結論である [金関, 1975: 41~43]。

しかし、金関の説の最後の部分は、世界で出土した古人骨の抜歯例をいちいち調べたうえで到達したものではない。中国の古文献、『紫式部日記』やプルタルコスの『倫理全集』など、抜歯と直接的な関係をもたない古今東西の文献記事や民族例を駆使しての推論であった。

「服喪の一形式」として歯を抜く習俗は、民族学でいう哀悼傷身の習俗の一種である。ここでは哀悼抜歯とよぶことにしよう。金関の説に関して、これまで私は、徳島県内谷石棺墓に副葬してあった1本の歯から古墳時代の哀悼抜歯の例を認め、縄文晩期に哀悼抜歯があったことを推定しながら、哀悼抜歯の系譜や意義については、それ以上に追究する手だてを考えあぐねていた。しかし、近年、琉球列島の抜歯例が増加し、その実態が明らかになってきた機会に、琉球、日本、中国、シベリア、アイヌ、アメリカ、ポリネシアの抜歯について比較検討したところ、中切歯と側切歯を中心に抜く抜歯様式がこれらの地域に共通して存在すること、古墳時代の日本、明・清代の中国西南部、18~19世紀のポリネシアに哀悼の意をあらわすための抜歯の習俗が存在することから、それらは系譜的につながり、哀悼傷身という同一の目的をもっていたのではないかと考えるにいたった。すなわち、本稿は、上下の中切歯 (I^1, I_1) と側切歯 (I^2, I_2) を抜く I^1/I_1 様式抜歯の成立とその拡散の問題の整理であり、この様式の抜歯の目的についての推定と、日本における哀悼傷身の習俗の意味についての考察である。

①……………世界の抜歯概観

1 抜歯か偶然か

日本列島は、抜歯の頻度、本数においてかつては世界でもっとも抜歯の習俗が盛行した地域であった。抜歯の対象になった歯は時期と地方によって異なる。時期と地方を問わなければ、抜く歯は、上顎・下顎とも中切歯から第1小臼歯の範囲（中切歯 $I^1 \cdot I_1$ 、側切歯 $I^2 \cdot I_2$ 、犬歯C、第1小臼

歯 $P^1 \cdot P_i$)である。しかし、世界的にみると、犬歯は歯根が太く長いために抜くのがむづかしいこと、第1小臼歯は奥によっているうえに歯根が2～3本あるばあい（第1小臼歯の歯根の本数は1～3本と個人差が大きい）は抜くのがむづかしいことから、抜歯の対象から外すことが多かった。すなわち、上顎と下顎の中切歯と側切歯の8本のうちのどれかを抜くのが普通である。

ここでまず問題になるのは、何を基準にして抜歯と認定するか、という点である。それは今回取りあげる17～18世紀頃のアメリカの抜歯に関して、習俗とみなすアレヘリチカの説 [HRDLIČKA, 1940] と、意図しない外傷による欠失とみなすチャールズマーブズの反対説 [MERBS, 1968; 1983] があり、現在では、後者の考えを採用し、極北のアメリカに抜歯の習俗があったことを疑問視する風潮がつよいからである [MILNER and LARSEN, 1991: 363～364]。

顎骨に植立していた歯が脱落すると、歯槽が閉鎖し、遠心側の隣接歯が捻転する。この状態をもってある歯が生前に脱落したと判断する。しかし、意図的な抜歯も、事故による歯の欠落も、暴力によって生じた外傷という点において、その本質はまったく変わるところはない。人の歯が欠けている原因を、習俗的な理由にもとづくものであると認定することは、当事者から聞き取りができた文献記録がある新しい時代のばあいは容易である。また、古い時代であっても、その遺跡の同時期の人骨に特定の歯を欠落している例がたくさんあれば、習俗によると判定することは、比較的容易である。問題は、多数の人骨のなかに、ある歯を欠失している例が少しばかり存在したばあいである。

オーストラリア、ポリネシア、アフリカの18世紀以降の抜歯は、ほとんどのばあいが上顎・下顎の中切歯と側切歯を対象にしている。そこで厄介な問題がおこる。上下の中・側切歯を中心に抜歯する風習をもっている人たちが、事故によって前歯を失ったばあいは、どちらと判定することができない。また、抜歯の風習を本来もっていなかった人たちが、事故によって、あるいは道具として使用して前歯を失ったばあいも、口伝や記録がのこっていなければ、同様に故意か偶然かの判断は容易でない。

たとえば、沖縄県港川の更新世後期末=旧石器時代後期、約18,000年前の人骨の下顎骨に中切歯2本を欠く例がある [SUZUKI and HANIHARA (ed.), 1982: 51～59]。左右対称的に欠いているし、歯を失ったあとの歯槽はきれいに閉鎖し、稜状の骨縁になっている (図1—1)。抜歯の習俗をもっていることが明らかな集団に属する人骨であれば、躊躇することなく抜歯と判断するほどしっかりした資料である。しかし、港川出土の抜歯の有無を調べることができる4体のうちの1例であるし、日本列島に確実な抜歯が現れるのはそれから約1万年後のことになる。習俗によるものだとすれば、日本最古の抜歯であるけれど、確かに習俗としての抜歯であったのかどうか、断定することは難しい。

20世紀の台湾原住民の間では、上顎の中切歯を抜くことは絶対にしなかった。その中切歯を失っていた2人にその理由を訊ねたところ、1人は木登りして落ちた時に2本欠いたといい、もう1人は崖から落ちて1本欠いたと答えている [宮内, 1940: 39]。転倒や事故による歯の外傷は、竹花庄司が例示した現代日本人15例のうち12例までは歯冠の破折であって、歯根まで失っていたのは3例にすぎなかった [竹花, 1968: 242]。破折した歯の大部分は上顎の左右中切歯であって、側切歯まで及ぶ例は少ない。交通事故のばあいに、上下の切歯が破折することがある。歯のなかで上顎の中

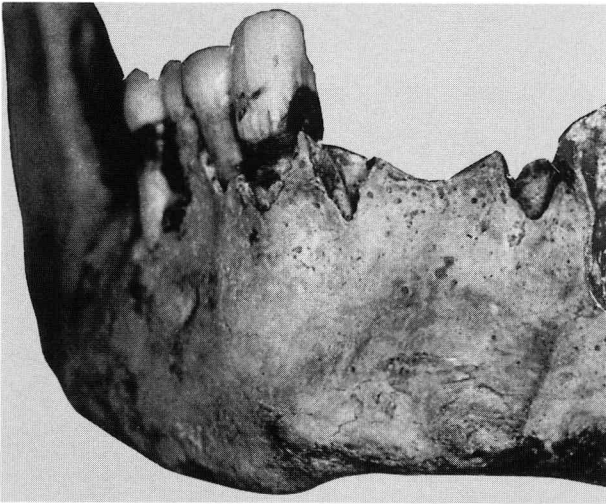
切歯はもっとも前面に盾のように位置しており、側切歯はそれに準ずるということであろう。しかしながら、石器時代人が事故で前歯を失うことはほとんどなかったらしい。岡山県津雲貝塚や愛知県吉胡貝塚、稲荷山貝塚などで見つかった縄文時代の多数の抜歯人骨（上顎側切歯・犬歯・第1小臼歯や下顎中・側切歯・犬歯・第1小臼歯を抜いている）のうち、上顎中切歯を欠いた例はまったくない。鹿児島県広田遺跡発掘の弥生時代の抜歯人骨32例（上顎の左または右の側切歯・犬歯を抜いている）の中にも「外傷性欠歯」は1例もない。この報告をおこなった大多和利明は、現代人のばあいにも、「歯牙は外傷によって1本だけが脱落欠如することは稀で数歯に及ぶことが多く、その際、上顎の左右の中切歯のいずれかが含まれるのが通例である」と指摘している[大多和, 1983: 590]。中国新石器時代の農耕民で側切歯を抜く習俗をもつ大汶口遺跡の人骨366体、大墩子遺跡の人骨66体などのなかにも、中切歯を欠失している例はまったく含んでいない。

また、化石人骨を見ても、猿人、原人、旧人、新人などで切歯や犬歯が欠けて歯槽が閉鎖している例はきわめて稀である。イギリス領のジブラルタル2号（下顎右の側切歯、5歳、旧人）、フランスのラ シャペル オー サン（上顎左の犬歯、旧人）の歯が欠けて歯槽が閉鎖しているのはその数少ない例であって、これらも意図的な抜歯でないともいえない。仲間の中でボスの地位をめぐる激しい争いをしたり、木に登ったりするチンパンジーやゴリラでも、前歯を折った例はあったとしても、前歯が抜けて歯槽が閉鎖した例を見ることはまずない。すなわち、事故による歯の折損や欠失は、現代の私たちが予想するほどには生じないのである。

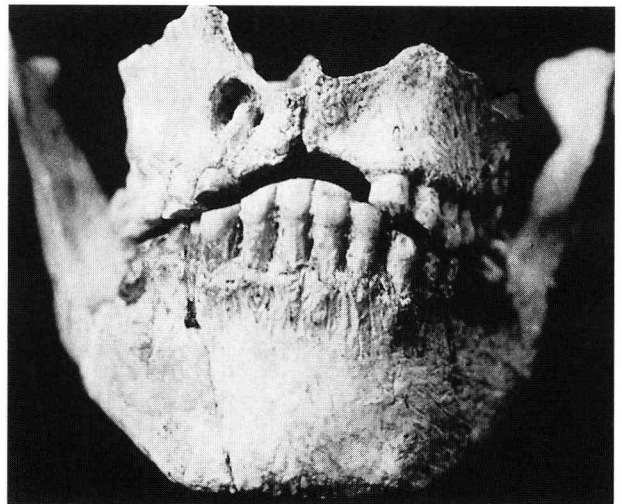
2 極北の欠歯・抜歯問題

アメリカの16～18世紀頃の「抜歯」は、上下の中・側切歯を中心に行っている。これを抜歯として報告したヘリチカの推定[HRDLIČKA, 1940]に対して、マーブズは極北の住民の歯の欠失の原因を、道具として前歯を使う過程での偶然の外傷に求めている[MERBS, 1968: 21～30]。すなわち、アフリカの成年式のさいの儀礼的抜歯が左右対称性と規則性をもっているのに対して、極北の人々の欠歯にはそのような傾向を見いだせないこと、アラスカに住むエスキモー（イヌビアク・ユピック）の欠歯例は子供や青春期の若い個体を含んでいること、その一方、アレウトやカナダのイヌイトは歯を皮なめしのさいに使ったり、肉を食べるときにペンチのように歯で肉をはさんで引っ張るので歯に強い力が加わるなど、前歯を「第3の手」として使うことによってその欠失が生じたことと主張している。そして、極北のアジア系住民（モンゴロイド）に抜歯の習俗が現在存在しないこと、抜歯を見たという記録もなければ、かつてあったという伝承もないことなど民族誌的な証拠をまったく欠いていることを強調している。

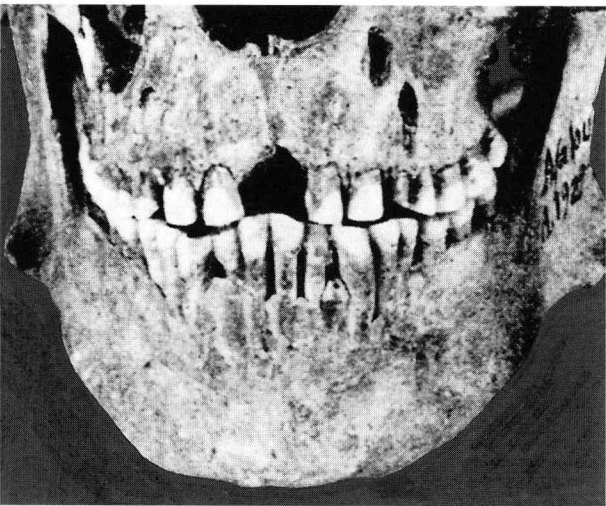
しかしその後、デラ クックはアラスカ湾の西端にあるコディアク島の人々（アルディック）の前歯の欠失について検討し、やはり抜歯の習俗があることを認めている。クックによると、幼児の中切歯・側切歯の乳歯を抜く習俗では、下顎は2～3歳で、上顎は6～7歳で抜いた証拠がある。また、成人の歯を抜く習俗がある。北西海岸のクワキウトル族では子供は生後10ヶ月経つと髪を焼きこがし顔に色を塗り、ウィシュラム族では子供が2歳になると名前をつけ直す。そのような機会に抜歯したという聞き取りや文献記録はのこっていないけれども、一種の入社式のさいに子供の歯を抜き、また少数の成人の抜歯については、コディアク島民のカースト制度とかかわりがあるのでは



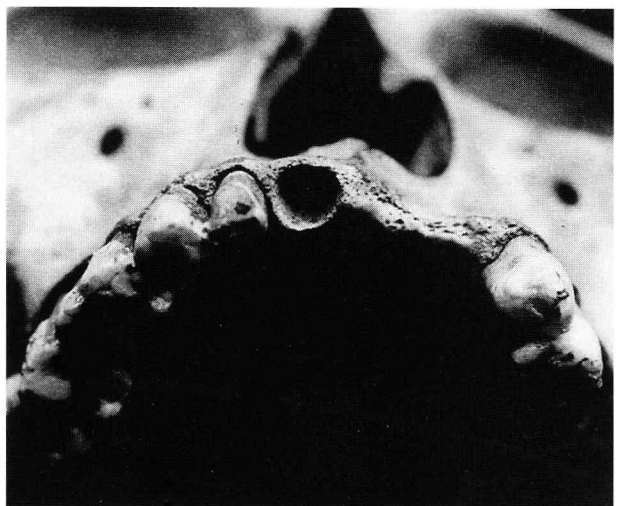
1 沖縄・港川 女, 旧石器後期



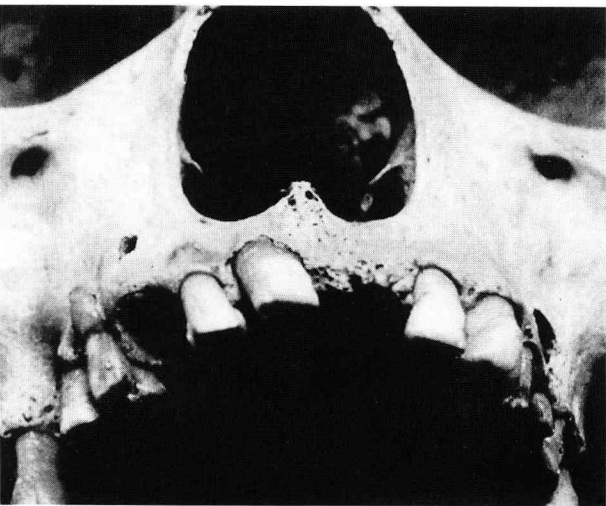
2 イスラエル・エルワド 女, 中石器



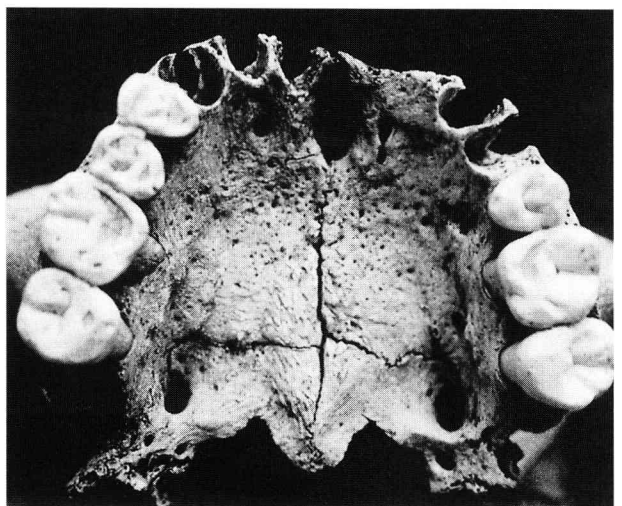
3 アルジェリア・アファルー 女, 中石器



4 アメリカ・セントローレンス島イヌイト 男, 近世

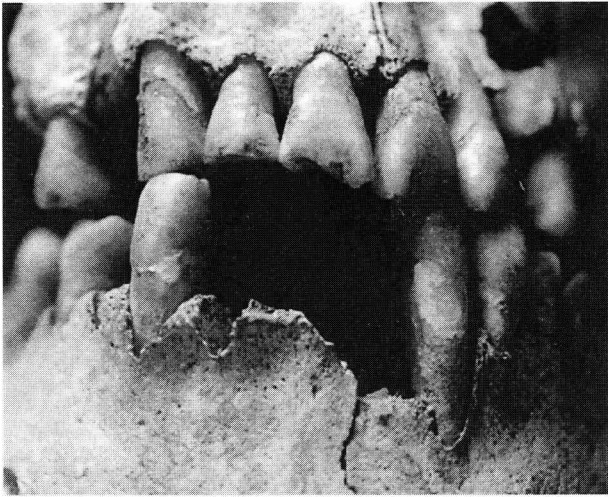


5 アメリカ・古ブエブロ 男, 近世



6 アメリカ・セントローレンス島イヌイト 男, 近世

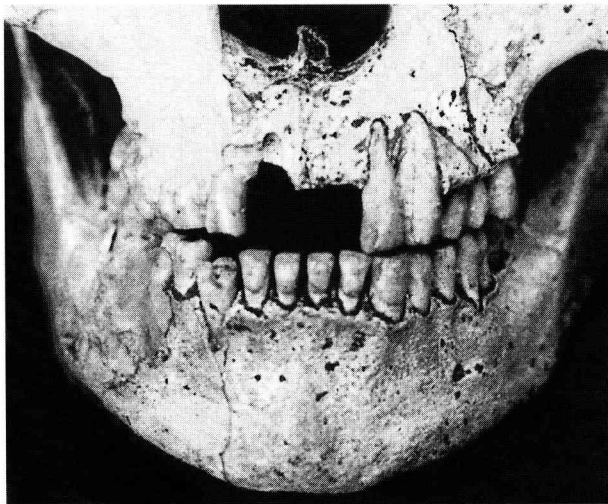
図1 上顎中・側切歯, 下顎中切歯の抜去例



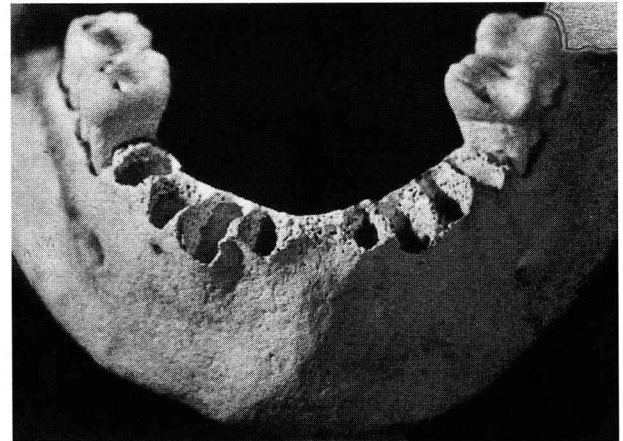
7 熊本・轟17号 男, 縄文前期



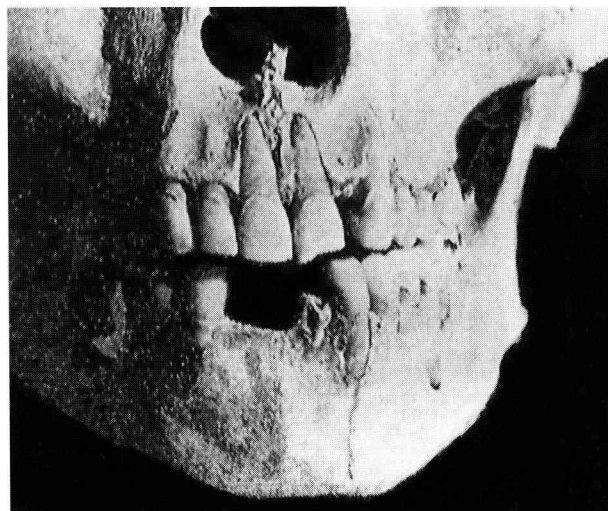
8 千葉・宮本台106号 男, 縄文後期



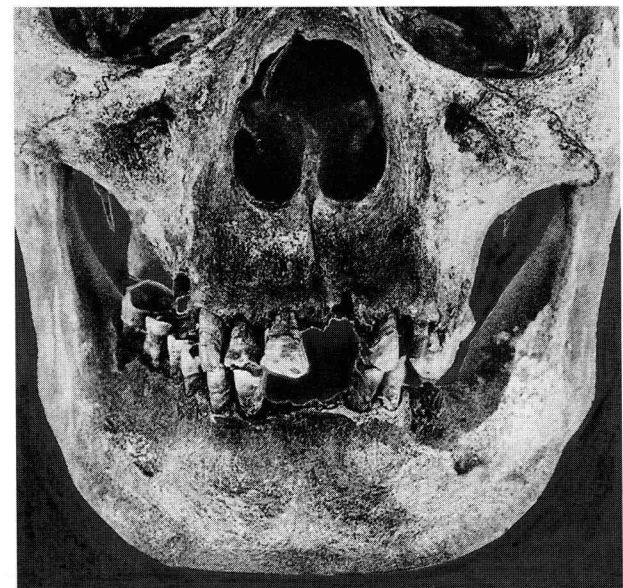
9 鹿児島・長崎鼻 男, 縄文晩期



10 鹿児島・下山田 女, 縄文後期



11 ハワイ・オアフ島 男, 18~19世紀



12 北朝鮮・楽浪王光墓 女, 前漢

図2 上顎中切歯, 下顎中・側切歯の抜去例

ないか、とクックは推測している [COOK, 1981:162]。

マーズの説に対しては、私は別の点から疑問をもっている。歯を道具として使った縄文人の有名な例は、鈴木尚が研究した神奈川県平坂貝塚（縄文早期）の男性の下顎骨である。鈴木によれば、左右側切歯の間、犬歯から第1大臼歯の間はそれぞれ近心―遠心方向に凹湾する一方、舌・唇―頬方向は凸湾している（図3）。このような状態になったのは、「口腔に含んだ、幾らか粗雑なものを、奥歯で軽く押さえながら、右手で、しかし時には左手を使って、その物を、口腔の外へ引き出すようなことを繰り返したのであろう」。このような行為として、「強靱な獣皮をはがしたり、裂いたりすることも考えられはするが、むしろ歯を使って獣皮をなめす仕事の方が、この過耗部の成因を、もっと適切に説明できる」として、イヌイトの女性の例をあげている [鈴木, 1963:134~142]。また、岡山県彦崎貝塚（縄文中期）の女性人骨も前歯の歯冠は強度の咬耗によって完全になくなり、わずかに歯根だけがのこっている状態である。その原因は、主として粗雑な砂混じりの食べ物によるもので、そのほか、骨から肉をかじり取ったり、歯を工作の道具に使ったり、動物の皮をなめした結果と鈴木はみている [鈴木, 1983:66~72]。けれども、歯を道具として使ったこれらの人々に切歯の脱落はない。歯を道具として使ったばあい、極度の磨耗はするけれども脱落にはいたらないのが普通である。

抜歯の習俗をもつとヘリチカが報告したイヌイトやアラスカ エスキモーは、歯を道具として使う民族としてよく知られている。カリブー（北アメリカに棲むトナカイ）・ホッキョクグマ・アザラシ・セイウチなどの獣肉や、サケ・イワナなどの魚肉を生で食べる時に、カナダのイヌイトは一端を前歯でくわえ、他端を左手でおさえて口元でナイフ（Ulu）を使って切っては口中の肉を食べていく（図4） [BALIKCI, 1931:写真;本多, 1963:29~30]。また、女性は皮をなめす作業を歯を使って絶えずおこなっている [本多, 1963:33~36]。したがって、これらの行為は確かに前歯に負担をかけ、歯冠の著しい磨耗の原因になっている。しかし、歯を道具として使っている民族の顎骨は発達するので、歯は歯槽に頑丈に植立しており、道具として使っても脱落するほど弱いものではない。アラスカ エスキモー（ユピック）の社会に入って調査したことのある小谷凱宣は、道具として歯を使ったために歯が欠落したという人を見かけた記憶がないという。なお、皮なめしは女性の仕事であるけれども、極北の人々の欠歯は、たとえばアリューシャン列島カガミル島収集の「プレ

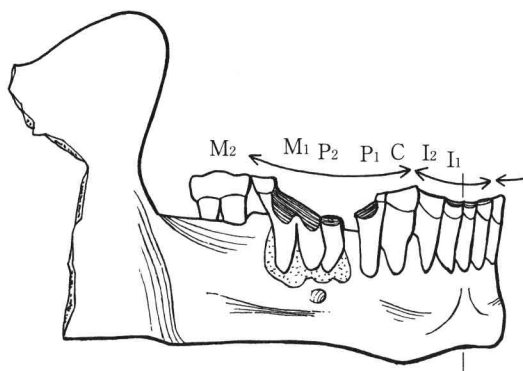


図3 平坂人の下顎歯の過耗部（第1大臼歯～犬歯、全切歯） [鈴木, 1963]



図4 前歯で生の魚肉の一端を噛んでナイフで切るイヌイト [BALIKCI, 1931]

「アレウト」では男46.9%、女38.6%、私の推定ではそれから約100～150年後の同島の「アレウト」では男18.5%、女14.7%、セントローレンス島のイヌイトでは男7.1%、女3.9%であって、かえって男性のほうの頻度が高い。少なくとも、皮なめしを欠歯の主な原因にあてることができない。

極北の人々の歯冠の縁が小さく欠ける現象と食性との関係について、ジョージR.ミルナーとクラークS.ラーセンは注目している[MILNER and LARSEN, 1991: 367～370]。小欠損の頻度は、サドラーミウトが87.5%、イヌイトが79%に対して、コディアク島民は37.9%、アレウトは22.8%である。このちがいは、カリブー・海獣の肉を食べる前二者がカリブーの骨を歯で噛み砕いて食べるのに対して、魚・海獣の肉を食べる後二者にはそれがないことによって生じるという。その一方、欠歯の頻度は、セントローレンス島のイヌイトが5.6%、同島以外のイヌイトが2.6%に対して、カガミル島の「プレアレウト」が43.0%、同島のアレウトが16.0%、コディアク島の「プレコニアグ」が7.0%、同島のコニアグが2.4%である。こうしてみると、歯を道具として酷使することと欠歯との間に相関関係を見いだすのは困難である。

意図しない欠歯か儀礼的な抜歯かの問題に関して注目すべきは、ヘリチカが抜歯として報告し、マープズが反対しているアリューシャン列島の例[HRDLIČKA, 1940: 18～19]にみられる欠歯の時代的な変化である。カガミル島のマミー(ミイラ)洞穴採集の古人骨(「プレアレウト」)の欠歯は、93体(男49、女44)のうち40体(男23、女17) 43.0%であって、その頻度は男女ともひじょうに高い。歯の欠失は男は上顎が主である一方、女は上・下顎が同程度にある。それに対して、「アレウト」の人骨の欠歯は、271体(男135、女136)のうち45体(男25、女20) 16.0%にとどまっている。歯の欠失は、男は上・下顎ともある一方、女は上顎が主である。

ロシア海軍のカムチャツカ探検隊のベーリングらがアリューシャン列島に到達したのが1741年、まもなくロシア人はアレウトを植民地化し、ミイラ作りを禁止する。マミー洞穴の利用の終わりである。「アレウト」の人骨の年代はこのころが下限だとすれば、「プレアレウト」はそれからさかのぼること100～150年ほど前であろうか。その間に、アレウトの海獣狩猟を中心とする生活様式で歯を使う部分に大きな変化が生じたとは考えにくい。しかし、これが抜歯であるならば、18世紀中ごろから末までの間におこったロシア人との接触と植民地化、アレウトの集落間の頻繁な戦争、イヌイトの住むコディアク島への遠征・襲撃そして戦死による人口の激減[ラフリン, 1981(スチュアートヘンリ訳, 1986: 279～280)]など急激な歴史の展開を外的な契機にして、在来の伝統的な風習が衰退することはありえないことではない。抜歯の存在について記述した民族誌が欠如していることをマープズは大きな根拠にしている。けれども、北方民族に関する民族誌は欠歯が衰退してしまった18世紀半ばからしか存在しないし、欠歯について言及し、それが抜歯の習俗ではないと記述した民族誌も存在しない。民族誌なるものには、当然のことながら、記録者が観察しなかったことや関心をもたなかったことについての記載はない。抜歯に関する民族誌がのこっていないことを強調するマープズの意見は差し引いて参考にしなければならない。

意図しない外傷では生じないと大多和利明が論じた上顎の左右の側切歯だけを欠失した例が、アレウトの男に2例、女に1例あるのも、抜歯の可能性が示している。その一方、コディアク島(アラスカ エスキモー)の「プレコニアグ」のばあいも抜歯はさかんとはいえないけれ

ども抜歯率が7.0%あるのに対して、それより新しいコニアグは2.4%でさらに低い。ヘリチカの「プレコニアグ」とコニアグとの区別はその後の考古学研究者には必ずしも容認されていないので、両者を合わせてコディアク島民（アルディック）として扱うならば、欠歯率は5.6%にすぎない。「プレアレウト」、アレウトとコニアグとが、同じように歯を使う日常生活をおくっていたとすれば、歯の脱落する度合いが民族間でこれほど違い、同じ民族で100年余りの期間でこれほど大きな変化が生じていることは、抜歯の習俗の可能性を考慮しないかぎり説明しにくい。

マープズは、極北の人々の歯の欠失に、アフリカの原住民の抜歯のような規則性がないことを強調している。たしかに、アフリカ原住民の抜歯は左右対称であり、規則的である。それは、一生に1回、成年式のときに1度に上顎または下顎の中・側切歯のうちから2本または4本を抜くだけだからである。その一方、18～19世紀のハワイの抜歯は同じように上下の中・側切歯であるけれども、2本～8本を抜き、その型式は変異に富んでおり、「規則的」とはいいがたい。それは首長や親族が亡くなったときに哀悼の意味で1～2本ずつ何回にもわたって抜き、一生かかって抜いた結果だからである。ヘリチカが報告しているモンゴル・シベリア・アメリカの抜歯例がハワイのあり方に似ていることは、のちに紹介する通りである。儀礼的抜歯の存在を証明する文献記録や伝承を欠いているものの、それはかつて抜歯の習俗が存在したことを否定する決定的な証拠にはならない。北海道アイヌに存在した死後の抜歯【久保寺、1956：96】も、久保寺逸彦が現地で聞き取り、彼の論文の最後に「雑纂」として付けてなければ、そのような習俗はなかったことになっていただろう。

本来ならば、アメリカ・シベリアの欠歯例については、実物にあたって丹念に観察し、さらに積極的な証拠を提示したうえで、意図しない欠歯か儀礼的抜歯かの結論をだすべきであるけれども、今回はそれは間に合わないので、習俗としての抜歯であると判断して、私はこれからの議論を進めていくことにしたい。

3 世界の抜歯の考古資料

抜歯の風習は世界的に広く分布している。抜歯の対象となる歯は、上顎・下顎ともに中切歯から第2小臼歯までの間である。集団・時代によって抜く歯の種類はちがうけれども、20本の歯のうちから、どの歯を選んで抜くかであるから、その組み合わせを厳密に想定すれば、数百種類の形態ができあがる。しかし、実際には型式はそれほどまでには多くない。

大きく分類すれば、次のとおりである。

上顎の中切歯を抜く

アフリカ（中石器、原住民）、西アジア（新石器）、シベリア（新石器・銅石器、近世?）、オーストラリア・ニュージーランド（原住民）

上顎の中切歯、下顎の中・側切歯を抜く

アフリカ原住民、琉球（縄文～古代）

上下の中切歯・側切歯を抜く

アフリカ（中石器）、中国（新石器）、ポリネシア（17～18世紀）、アレウト、コニアグ、アイヌ
上顎の側切歯を抜く

中国（新石器～明代）、日本（縄文中・後期、弥生前・中期）

上顎の側切歯・犬歯を抜く

台湾（新石器～20世紀）、日本（弥生前期・土井ヶ浜、弥生後期～古墳・種子島）、オーストラリア（原住民）

上顎の犬歯・側切歯・第1小臼歯、下顎の中・側切歯・犬歯・第1小臼歯を抜く

日本（縄文晩期～弥生前期）

抜歯の風習はいつ始まったのか。

縄文前・中期には、下顎の中切歯2本を抜いた例が熊本県轟貝塚、広島県太田貝塚などで少数見つかっている。しかし、日本で本格的に抜歯の習俗が始まるのは、中期末の仙台湾地方であって、上顎の左または右の側切歯を抜いていた [山内, 1937; 春成, 1980: 40~61]。

西アジアでは、イスラエルのワド洞穴で上顎の中切歯1~2本を抜いた女の例が、無土器新石器時代（ナトゥーフ文化、約12000年前または約11000年前）の層から見つかっている。[SMITH, 1991: 427]

北西アフリカでは、中石器時代に地中海沿岸に発達したオラン文化（約10000年前）に、抜歯例が知られている [BRIGGS, 1955]。アルジェリアのアファルーブールンメル岩蔭に、上顎中切歯を主に、ときには上顎の全切歯を抜いた例があり、メシュタエルアルビでは、上顎の中切歯に加えて、下顎の中切歯2本または全切歯を抜いている。モロッコのタホルルトでは、上顎中切歯を主に、一部は上顎の全切歯を抜いている。オラン文化は西アジアに起源があるという。西アジアからアフリカにかけての地域の抜歯は、西アジアで生まれ、地中海を西に伝わって広まったのかもしれない。北西アフリカでは、8~11歳の間に歯を抜いているので、成人式と結びつくかもしれないけれども、年齢階梯制の社会であったかどうかを知る手段がないので推測の域をでない、とブリッグスは慎重である。

その一方、東アジアでは、中国山東省の北辛遺跡（北辛文化）の抜歯—おそらく上顎の側切歯2本を抜く—が知るかぎり最古である [HAN & NAKAHASHI, 1996: 4]。約7400~6300年前であるから、アフリカ・西アジアよりは遅れる。北辛文化につづく大汶口文化の時期になると、上顎の側切歯2本を抜いた例が多数見つかっており、成人式との関連を説く意見がある [韓・潘, 1981: 70]。

オセアニアでは、発掘例では、オーストラリア東南部のヴィクトリアの諸遺跡発掘の人骨223体のうち34体に1~2本の抜歯があった。うち上顎が28体（右中切歯14例、左中切歯9例、右側切歯2例、左側切歯3例）、下顎が1体（左犬歯1例）である [CAMPBELL, 1981: 117]。17世紀末のオーストラリア北西部では、老若の男女が上顎の中切歯2本を抜いていた、という。現在知られているオーストラリア最古の抜歯例は、ニッチエ湖付近で見つかった約7000年前の男性人骨であって、上顎の中切歯2本を抜いている [MACINTOSH, 1971: p1. 3]。

なお、タンザニアの資料では、1000年紀初めのユーロポイド型の頭骨をもつマカリヤ墓地遺跡とウィリイのコブジェ遺跡では下顎の中切歯2本を抜く風習をもっているのに、2000年紀のナクル墓地の本質的に非ネグロイド型の人骨には抜歯の痕跡は認められなかった。そこで、池田次郎らは、下顎中切歯を抜く風習を地中海人と関連づけることは支持できないとしている [IKEDA & HAYAMA, 1982: 22~23]。アフリカの抜歯の起源は古いし、20世紀までその風習はあったので、ど

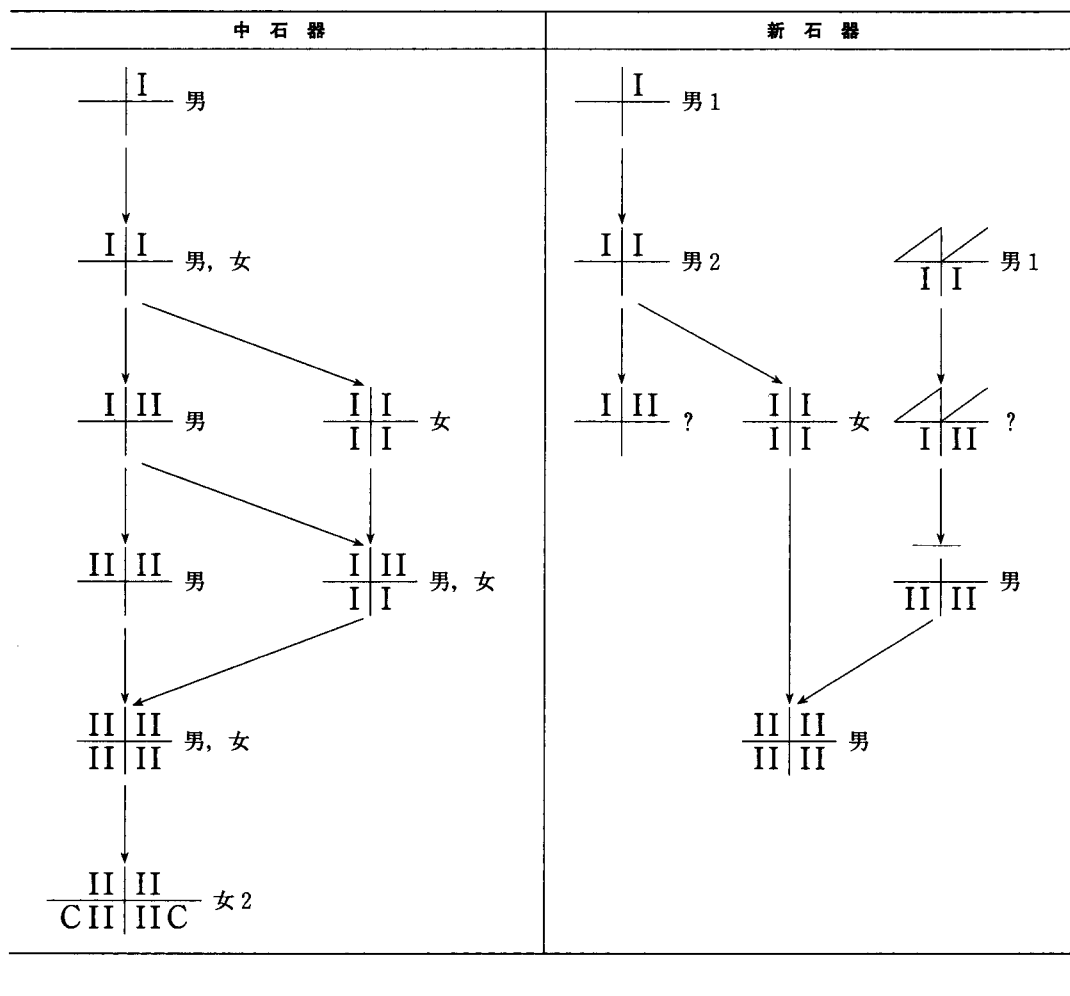
の地方でも連綿とつづいてきたかのようにみえるけれども、そうではなく民族の移動やその盛衰の歴史を考慮しなければならないことをタンザニアの例は教えている。

ヨーロッパは抜歯の習俗があまり発達しなかった。イギリスでは、上顎中切歯2本を抜いたドッグホールズ洞穴やパーシクワルー洞穴、下顎中切歯2本を抜いたガレイヒル遺跡など新石器時代後期の例がある。フランスのヴォーデンクール横穴石室墓の新石器時代後期例は下顎中切歯2本を抜いていた [NEWTON, 1895; JACKSON, 1915]。イタリアのカラコロンボ遺跡やフォンテヴィヴァ遺跡などの新石器時代例では女性30体のうち7体は下顎の中・側切歯を主に抜いている一方、男性22体には皆無であった [ROBB, 1997]。しかし、ヨーロッパではその後はこの習俗はあまりふるわず、中・近世に刑罰としての抜歯があったといどである。

抜歯は、アジアからアラスカ、北アメリカの原住民、さらに南アメリカの原住民の間に広がっており、これらの地域では上顎または下顎あるいは上下の中・側切歯を抜くのが常であった。しかし、これらの地域では抜歯の頻度は高くはなかった。

南アメリカでは、ペルーの古代住民がやはり上顎または下顎の中切歯2本、あるいは上下の中・

表1 北西アフリカ中・新石器時代の抜歯 [BRIGGS, 1955] から作成



側切歯を抜いていた。また、エクアドルのグアンカヴィルカ族の男が歯を1本必ず抜いていた、という。

以上に見てきたように、新石器時代以来、中国、日本、シベリアでは抜歯の習俗がさかんであった。アジアはアフリカとともに世界の二つの発達の中心地となり、一部の地域では20世紀までのこっていた。世界の抜歯は上顎または下顎の中・側切歯を抜くのが先史例・民族例ともに一般的であって、犬歯を普通に抜くのは、台湾と次に述べる日本だけであった。

4 世界の抜歯の民族資料

中国の抜歯について、少数民族の間にのこっていた習俗を漢民族の人が記録にのこしている。それによると、成人式、結婚式、葬式などに際して歯を抜くことがあったようである〔金関、1976：268～270〕。

その一方、オーストラリア原住民は7～8歳、または11～12歳のときに成年式にさいして上顎の中切歯1～2本を抜歯していた。グルブレン族では、上顎の中切歯2本を同時に抜き、愛児の記念品として母親が保存していた。クーパー湖、ゲルドナー湖付近では、男女とも8歳になると上顎の中切歯2本を一度に抜いて保存した。善い神の気にいられるように、ということである。マックアリー族では若い男の右上の中切歯1本を抜いていた。悪い神に食い殺されないようにするためである、という。17～18世紀にもこの風習があったことは、ヨーロッパの探検家たちの報告によってわかる〔POUNDER, 1984：49～50〕。

また、ニュージーランドの西海岸では、すべての住民が上顎の中切歯2本を抜いていたという。メラネシアではニューヘブリデス諸島にしばしば認められた。婚約または結婚すると上顎の中切歯2本をぬいたという。

ポリネシアでは、ハワイで18～19世紀に、首長や親族が亡くなったときに、死者への哀悼の意味で、上・下顎の中・側切歯をさかんに抜いていた。

アフリカは20世紀にいたっても抜歯がさかんだ地域である。黄金海岸近くのアシャンテ族は、敵の捕虜から歯を抜いて奴隷として使い、抜いた歯をトロフィーとして身につけた。トーゴランドでは、下顎の中切歯2本を抜いていた。ツアーデ湖付近のサマラオ族、サラ族、バイ族ではそれぞれ1、2、4本の上顎切歯を抜いていた。ナイル川上流のニャムニャム族、ボンゴ族、ディンカ族などでは下顎の中・側切歯4本をぬいていたが、下顎の中切歯2本を抜く種族や上下の切歯を抜く種族もあった。アルール族では男女とも10～12歳ごろになると、下顎の切歯4本を一度に抜いていた。ある女が怒って夫に噛みついたので、それ以来まず女が、次いで男も抜くようになったと伝えている。東アフリカでは、マサイ族が下顎の中切歯2本または切歯4本を抜いていた。ザンベジ地方のマトンガ族では、16歳になると上顎の中切歯2本を抜いた。抜歯して初めて成人と認めるといふ。コンゴ地方ではバクバ・バディンガ・バツソング族の男女が思春期前後に上顎の中切歯2本を抜いていた。西海岸のバンツー系のオバンボ・オバヘレロ族は下顎の中切歯2本を抜いていた。

なお、ケニアのツルカナ族には、犬歯を中心に側切歯、第1小臼歯の乳歯を抜く習俗が現在もある〔大橋ほか、1994〕。乳犬歯の萌出が健康傷害をもたらすという考えからだといふ。しかし、観察

した子供103人のうち3～9歳の15人に抜歯を認めたというように、頻度は高くない。ツルカナ族などには下顎の永久歯の中切歯2本を抜く風習もある [INOUE et al, 1992]。破傷風や毒蛇に咬まれたさいに歯をくいしばっても、水分や薬を流し込むことができるように6歳のころに歯を抜いておくのだ、と答える者がいたという。

要約すると、アフリカの東部と中東部では主に下顎の中切歯2本を抜き、北部や南部では上顎の中切歯を主体として、さらに側切歯や犬歯を抜いている。抜歯の表向きの理由はさまざまであるけれど、成年に達したしるし、種族の目印（マサイ族など）などである [LIGNITZ, 1919-1920; 鈴木, 1940: 8～12; IKEDA and HAYAMA, 1982]。

5 日本の抜歯

下顎の中切歯を欠く例は、日本では縄文前期～中期、約5000年前に熊本県轟貝塚と広島県太田貝塚に現れる [HASEBE, 1925: 83～87; 今道, 1933]。前者は9体のうちの男2例、後者は27体のうちの男女各1例にすぎないので、日本における最古の確実な抜歯の証拠とみてよいのか、問題はのこる。ただし、下顎の中切歯を欠く例は、九州から東北地方にいたるまでの縄文中・後期の遺跡からも少数ながら見つかっており、琉球列島では縄文後・晩期以降、10世紀以降まで発掘例がある。

その一方、縄文中期末、約4000年前に東北地方、仙台湾の周辺で上顎側切歯を1本抜くI²様式が始まる。施行率は80%以上に達し、確かに風習として定着したことがはっきりする。後期になると分布は広がり、北海道から関東地方までは確実にその分布圏に入る。側切歯の左または右のどちらか1本を抜いている。左右の割合はほぼ同じで、それぞれ男女をふくんでいる。

縄文後期の中ごろないし後半になると、上顎の左右の犬歯、または上下左右の犬歯を抜く2C、2C/2C様式に変わる。岩手県湧清水、広島県寄倉でたくさんの例が見つまっているから、少なくとも本州にはこの様式が広まったのであろう。

そして、縄文晩期になると、西日本では、上顎左右の犬歯を抜いたあと、下顎左右の犬歯または中・側切歯を抜く4I・2C様式の抜歯が一般化する。

弥生時代になると、上顎左右の側切歯を抜くI²様式が現れ、上顎または下顎の犬歯を抜く2C様式と共存する。現在、山口県を中心にして見つまっている。長身・高顔の人が大陸からもたらした様式であろう。しかし、同じ時期に西九州には上下の犬歯を抜く縄文晩期の様式がのこっていた。

その一方、東日本の弥生前期には、上顎の犬歯・側切歯と下顎の中・側切歯を抜く西日本縄文晩期の4I型が現れ、中期まで盛行する。また、死後に抜歯して、その歯に孔をあけてアクセサリーにすることが流行する。

後期になると、列島規模で抜歯の習俗は衰退していく。しかし、I₁I₂様式は数は少ないながらも、つづく。

古墳時代の抜歯例は九州・山口を中心に鳥取・岡山・奈良・徳島までおよんでいる。抜歯の頻度は、抜歯の有無を検査しえた103体のうちの24例、23.3%である [土肥・田中, 1988: 198]。古墳時代には、例は少ないけれども、西日本にひろく存在した習俗ということになる。上顎の中切歯、下顎の中・側切歯を主に上顎の犬歯を抜く例もある。下顎の中切歯のばあいは2本抜くことが多い。抜いた歯を死者の棺内に納めた例があるので、少なくとも一部は哀悼抜歯であろう。

その後、抜歯の習俗はいったん見なくなる。そして、近世～近代の長崎や大分の家船生活者の間に成女式のときに歯を抜いたという報告がある。

以上の地域ごとの変遷を確かめたうえで、抜歯の意味について以下のように私は考えた〔春成, 1973; 1974; 1984〕。

- 1) 東北地方の縄文中期末・後期初に現れるI²様式は、婚姻が成立したさいに抜歯したもので、その村の出身者との村から入ってくる者とは抜く位置を異にしていた。
- 2) 西日本の縄文晩期の4I・2C様式は、上顎の犬歯を成人になるとき、下顎の犬歯および中・側切歯を婚姻のとき、上顎の側切歯と第1小白歯および下顎の第1小白歯を葬送のときに抜いた。
- 3) 弥生前期に渡来人がもたらした上顎側切歯を抜く大陸系の抜歯は、成人になるときのものであったが、縄文晩期以来の様式と共存することによって、渡来系と縄文系とを区別する標識ともなった。
- 4) 弥生中・後期になるとわずかに成人式とかかわる抜歯をごく一部の集団がのこすだけになってしまった。
- 5) 古墳時代には一部の地方で、死者に対する哀悼の意味で遺族の一部が歯を抜いた。
- 6) 近世・近代の成女式のさいに家船生活者の一部では歯を抜くことがあった。

これをまとめると、日本列島の抜歯は、婚姻→婚姻・成人・哀悼→成女・哀悼の変遷をたどったということになる。

②……………II¹/II₂様式の抜歯

1 中国の抜歯

中国というより東アジアの抜歯習俗の起源地は、新石器時代の山東省付近と江蘇省付近の2個所にあり、それぞれ異なる抜歯様式をもって始まる。

山東省付近では、北辛文化(約7000年前)にその習俗は現れるらしいが、詳細は未報告である。

大汶口文化早期(約6000年前)には、上顎左右の側切歯2本を抜く2I²型すなわちI²様式が知られている。山東省の王因遺跡では大汶口早期の人骨366体のうち281体に抜歯があり、そのうち275例がI²様式、大汶口遺跡では大汶口早期の26体のうち19体に抜歯があり、そのうち17例がI²様式、同中期の23例、西夏侯遺跡では同晩期の10例、呈子遺跡では同中期の14例、野店遺跡では7例がこの様式である。江蘇省の大墩子遺跡では同早期23例がこの様式である。片方の側切歯だけの抜歯もあり、大墩子と王因に各4例、呈子、陵陽河、橋溝前寨に各1例ある。このことは、1回の抜歯は左または右の側切歯1本であって、2回目に両側になった可能性を示唆する。そして、1回目と2回目とは比較的近接した時期であった可能性も考えさせる。大汶口文化早期の抜歯率は、70%台～90%台で高い。そして、中期まで盛行したあと、晩期になると50～60%に落ちる。抜歯した人骨のうち、もっとも若い個体は12～16歳であって、10代なかばごろから抜歯を始めたと考えてよい。

ところが、三里河遺跡の大汶口文化晩期(約4900～4700年前)には、30体のうち抜歯はわずか3体、10.0%であって、男1体は上顎の中切歯2本を抜く2I¹型、男1体は下顎の中切歯2本を抜く

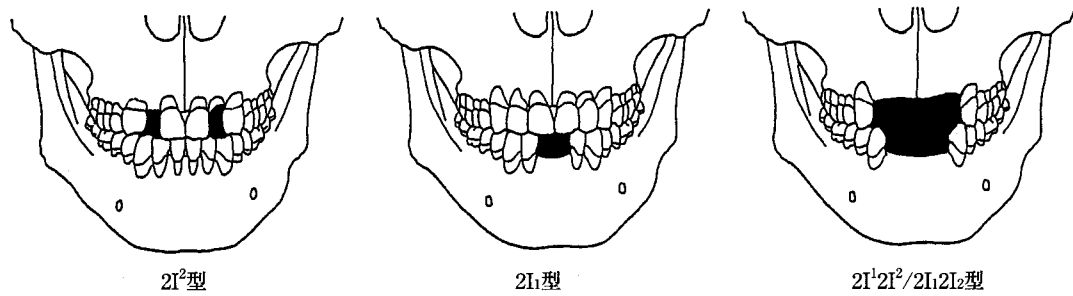


図5 中国新石器時代の抜歯

2I₁型で、女1体は上顎側切歯を抜く従来のI²様式である。3例のうちもっとも若い個体は、30～35歳である〔韓ほか、1981：75；HAN et al. 1996：45〕。橘溝前寨遺跡でも13体のうちI²様式の抜歯が2体、15.4%にすぎない。I²様式の抜歯は消滅寸前の状況である。

三里河遺跡では龍山文化（約4400～3800年前）になると、上下の中切歯を抜くI²/I₁様式が主体となり、様相は一変する。33体のうち7体、21.2%に抜歯があり、抜歯率は少し高くなる。男は下顎の中切歯だけを抜いた2I₁型が3例、それに加えて下顎の側切歯まで抜いた2I₁2I₂型が2例ある。女は上顎の中・側切歯を抜いた2I²2I²型は2例あり、2本の側切歯を抜いた1例は、あわせて下顎の中切歯2本を抜いた2I²/2I₁型である。それまで1人につき2本が普通だったのに対して、三里河では、6本1例、4本2例、2本1例、1本1例であるから、これまた大きな変化である。抜歯例のうちもっとも若い個体は30～35歳であって〔同前〕、大汶口文化の諸例にくらべると、15～20歳上である。

山東地方では大汶口文化が終わるころに、I²様式は消滅し、まもなく下顎の中・側切歯を中心に抜くI₁様式が現れ、抜歯率は20%を少し超える。抜歯する年齢も、それ以前にくらべると、10歳くらい上から始まっているようにみえる。これらの変化はきわめて大きく、抜歯の理由が大汶口文化晩期末ごろ完全に変わったと考えるほかない。しかし、次の二里頭文化（約3800年前）になると、山東省など黄河流域での抜歯の習俗はもはや廃れている。なお、山東省では、城子崖遺跡から戦国時代のI₂様式に属する抜歯例が出土している。この時代にI²様式の抜歯習俗をもっていた他地方からの移住者があったと解釈すべきなのであろう。

安徽省富庄遺跡では、抜歯している13例のうち上顎の側切歯だけを抜いている2I²型は女3例だけである。その一方、上顎の側切歯だけでなく中切歯と犬歯を合わせ抜き、さらに下顎の中切歯や側切歯を抜いたI²/I₁様式があり、その合計は10例に達する。抜歯率は、92.9%でひじょうに高い。もっとも若い例は、16～18歳である〔韓、1982：19～20〕。上下の切歯と上の犬歯合わせて10本抜いた2I²2I²2C/2I₁2I₂型の1例は18～20歳の男、上下の切歯を計8本抜いた2I²2I²/2I₁2I₂型の3例のうち1例は16～18歳の男、上顎の切歯・犬歯計6本を抜いた2I²2I²2C型の1例は18～20歳の女である。つまり、十代で早くも6～10本の歯を抜いている。成年式のときに抜歯したという通説では、とうてい説明できない状況である。「大汶口文化？」とされるけれど、抜歯のあり方は、龍山文化的である。大汶口文化だとすれば、抜歯の新しい様式が安徽省付近で生成した可能性があろう。

その一方、江蘇省付近の馬家浜文化（約6000年前）の圩墩遺跡では、上顎左または右の隣接する中・側切歯2本だけを抜く偏側性のI²型から抜歯の風習が始まる。39体のうち27例（男14，女13）に抜歯があり、左側が10例（男8，女2），右側が17例（男6，女11）で、抜歯率は69.2%である〔NAKASHI, 1995: 96~97〕。互いに離れた位置にある側切歯を2本抜くのと、隣接する中・側切歯を2本抜くのとでは、抜いた後の見た目はまったくちがう。左右のちがいに深い意味を与えて、左右に抜きわけたと思われるべきなのであろう。なお、抜歯例のうちでもっとも若い個体は、14~16歳である。

ところが、同じ文化をもつ江蘇省三星村遺跡（1例）や上海市崧沢遺跡（3例）では上顎の左右の側切歯2本を抜く山東省と同じ2I²型である。屈家嶺文化の湖北省七里河遺跡（12例）でも、2I²型が主体になっている。七里河遺跡では、他に上顎左右の側切歯と犬歯の計4本を抜いた2I²2C型が2例混ざっていた。もっとも若い個体は30歳である。そして、それから4000年以上のちの四川省洛表遺跡では、14~17世紀に属する男女10体のうち抜歯した6例（男3，女3）はすべて2I²型であった。21~23歳がもっとも若い個体である。

さらに南にくだった広東省河宕遺跡（約5600~4500年前）では、上顎切歯だけの抜歯で、側切歯だけを抜いた2I²型が14例でもっとも多い。しかし、左右の中切歯だけを抜いた2I²型の女1例、左は側切歯、右は中切歯を抜いたRI¹LI²型の男1例、左右の側切歯に加えて右の中切歯を抜いたRI¹2I²型を男女各1例、左の中切歯を抜いたI¹型の女1例を含んでおり、もっとも若い個体は22~25歳である〔韓・潘, 1982: 48~49〕。中切歯と側切歯を併せて抜いた例は、圩墩遺跡と一部類似する。

広大な面積を占める中国では、地方によって抜歯の発達の仕方は大いに異なる。山東省のようにI²様式に始まり、それが廃れたあとII₂様式が現れ、まもなく消えていった地方、安徽省のように大汶口文化?の時期にII₂様式がさかんであった地方、江蘇省のように偏側性のI²様式から始まりI¹様式へと大きく変化した地方、四川省のように龍山文化ないしそれ以後にI²様式が伝わって来て遅くまでのこった地方などが存在する。

上顎の側切歯2本を抜く大汶口文化のI²様式のばあいは、13~14歳から14~15歳に抜歯している。上顎左または右の中・側切歯2本を抜いた馬家浜文化のばあいも14~16歳に始めたようである。抜歯の率も高いから、これらの文化では成年のしるしとして抜歯した可能性がたよいであろう。ただ、上顎の片側の側切歯だけを抜いた例が、いくつかの遺跡で見つかっている。大汶口文化の王因遺跡では抜歯している279例のうち275例が左右の側切歯、4例が片側の側切歯を抜いている。大墩子遺跡では27例のうち23例が左右の側切歯、4例が片側の側切歯だけを抜いている。二つの遺跡とも少数例ながら1本だけの抜歯例がまじっているのは、見過ごせない問題である。つまり、左右の側切歯2本を抜いているばあい、2本の歯を同時に抜いたのか、それとも2回に分けて抜いたのかという疑問である。側切歯の右と左を抜いた時期に前後の関係がある可能性も考慮しておいたほうがよいのであろう。もしそうであれば、2本の間には意味のちがいがある可能性がでてくる。しかし、現状ではこれ以上の追究はできない。

山東省のII₂様式抜歯の出現は突然である。上顎の中切歯を抜くI²型や2I²型は、江蘇省の圩墩遺跡（馬家浜文化）、広東省の河宕遺跡（約5000年前）にすでに存在するので、馬家浜文化など他地

表2 中国山東省の抜歯率 (*は性不明の個体を含む)

北辛	北辛			
王因	大汶口早期	76.8%	(281/366)	(男205/265>女 76/101)
大汶口I	大汶口早期	73.1%	(19/26)	(男 12/17 <女 7/9)
呈子	大汶口中期	93.3%	(14/15)	(男 7/8 <女 7/7)
大汶口II	大汶口中期	74.2%	(23/31)	(男 7/11 <女 16/20)
尚庄	大汶口中期	71.4%	(5/7)	(男 1/1 >女 4/6)
五村	大汶口中期	6.3%	(1/16)	(男 0/9 <女 1/7)
陵陽河	大汶口晩期	60.0%	(9/15*)	(男 6/10 <女 3/3)
野店	大汶口	58.3%	(7/12)	(男 4/8 <女 3/4)
西夏侯	大汶口晩期	50.0%	(10/20)	(男 6/10 >女 4/10)
橋溝前寨	大汶口晩期	15.4%	(2/13*)	(男 1/5 >女 1/6)
三里河I	大汶口晩期	10.0%	(3/30)	(男 2/21 <女 1/9)
三里河II	龍山	21.2%	(7/33)	(男 5/21 >女 2/12)

表3 中国のI²/I₁様式の抜歯 (Lは左, Rは右をあらわす)

山東省膠県三里河	大汶口晩期	約5000~4500年前	R ² 男1, 2I ₁ 男1, 2I ² 女1	10.0%
	龍山	約4500~4000年前	I ₁ 1, 2I ₁ 1, 2I ₁ 2I ₂ 1, 2I ² /2I ₁ 1, I ² /2I ₁ 2I ₂ 1	21.2%
江蘇省常州市圩墩	馬家浜	約6000~5000年前	R ¹ I ² , L ¹ I ² 計27	69.2%
安徽省亳県富庄	大汶口?	約4500年前	2I ² 女1, 2I ² 2I ² C 女1, 2I ₁ 男1, 2I ² 2I ² C/2I ₁ 2I ₂ 男1, 2I ² 2I ² C/2I ₁ 2I ₂ 男1, 2I ² 2I ² , 2C/2I ₁ 2I ₂ 男1	92.9%
広東省佛山市河宕		約5000年前	2I ² 1, 2I ² 10, I ² 1, I ² 2I ² 2	86.4%
遼寧省寧城県南山根	夏家店下層	約4000~3400年前	2I ² 1, 2I ² /2I ₁ 2I ₂ 1	
北朝鮮ピョンヤン市王光墓	前漢	約2100年前	L ¹ /2I ₁ 女1	

方からの影響を想定すべきなのかもしれない。ただし、圩墩遺跡の抜歯のうちもっとも若い例は14~16歳である。この例が男か女かが問題である。女ならば、成人→婚姻抜歯と解釈することもできる。河宕遺跡では22~25歳である。抜歯してすぐ死亡するというわけではないから、単純にはいえないが、25歳前後、35歳前後、50歳以上で歯を抜いていない女が計3人いる。河宕遺跡では年齢的におそく抜歯を始めた可能性もあろう。

なお、中国の周辺部では、遼寧省の南山根遺跡から上顎の中切歯2本を抜いたI²型1例、上顎の側切歯2本と下顎の中・側切歯4本を抜いた2I²/2I₁2I₂型が1例見つかっている〔韓ほか、1981: 76〕。夏家店下層(二里頭文化、約3900~3500年前)の時期である。また、北朝鮮の前漢代、前1世紀の楽浪王光墓の壮年女性の抜歯〔今村、1935〕が、上顎の中切歯1本と下顎の中切歯2本を抜いたI²/2I₁型であって、その時代と広がり注目される。

2 シベリア・モンゴルの抜歯

シベリア最古の抜歯は新石器時代までさかのぼる。イルクーツク付近の遺跡から発掘された66体(男40, 女26)のうち、男5体に上顎中切歯2本を抜いた2I²型があった(抜歯率7.6%)。ヘリチカ

の報告 [HRDLIČKA, 1940] には、イルクーツク地区と記してあるだけで、遺跡名を記載していない。ヘリチカの他の論文 [HRDLIČKA, 1942: 436~440] によると、アンガラ川流域で収集した30体のうちの4体およびレナ川上流付近で収集した5体のうちの1体の人骨（イルクーツク博物館蔵）であるから、いくつかの遺跡から出土したさまざまな時期の人骨をふくんでいる可能性が大きい。アルタイ山脈のオイロツカイ出土の8体（男7, 女1）のうち、上顎中切歯2本を抜いた2I型の男1体、上顎左中切歯を抜いたI型の女1体は「銅石時代」とされているから、おそらくアフアナシエヴァ期（約4000~3000年前）の人骨であろう。イルクーツク地区の抜歯例は、その前につながる新石器時代でも後期のグラスコーヴォ期（約5000~4000年前）の人骨にあるのかもしれない。シベリアの抜歯は、中国の龍山文化の抜歯と、時期的にも様式的にも近い。中国からの影響があってシベリアの2I型の抜歯の習俗は始まった可能性を考えておきたい。

イルクーツク地区にのちに住んでいたのは、牛・馬・羊の牧畜で生計をたてるブリヤートである。ブリヤートも上・下顎の中・側切歯を抜くI²/I₂様式をもつから、この地区では新石器時代以来抜歯の習俗が連綿とつづいてきた可能性がある。ただし、イルクーツク新石器時代の抜歯が男だけであるのに、ブリヤートは男7.1%, 女38.4%, オビ川西部のマンシ（ヴォグール）は男0%, 女14.8%であって、女が主となっている。

アジア北部では、さらに、モンゴル・ウリチ・サモイェード・ヤクート・ハンティ・ニヅフ・チュクチの諸民族に抜歯の習俗があったことを示す人骨が見つかっている。

モンゴルは中国の北部に広がる広大な地域に住み、北東部はブリヤートに接する。抜歯率はブリヤートと並んで、20%台であって他よりも高い。ただし、モンゴルでは男中心であるのに、ブリヤートでは女中心の習俗となっているのは、その社会の構成と関係があると考えられることもできる。いずれも上下の中・側切歯を抜いたI²/I₂様式である。下顎の中切歯1本から抜き始めて中・側切歯3本にいたる系列、上顎の中切歯1本から2本にいたる系列がある。

サハリン北部のニヅフ（ギリアーク、狩猟・海獣狩猟・トナカイ飼育民）にも、上顎のI²様式の抜歯があり、それと接するサハリン南部のアイヌ（漁撈民）にも抜歯がある。北海道（国後島を含む）アイヌの抜歯も、抜く歯の種類、14.5%という高くない頻度などにおいてシベリアと共通してお

表4 シベリア・モンゴルの抜歯率

イルクーツク（新石器時代）	7.6% (5/66)	(男 5/40 > 女 0/26)
オイロツカイ（銅石時代）	25.0% (2/8)	(男 1/7 < 女 1/1)
ブリヤート	22.2% (12/54)	(男 2/28 < 女 10/26)
モンゴル	20.1% (36/179)	(男 29/106 > 女 7/73)
ウリチ	16.7% (3/24)	(男 1/9 < 女 2/15)
サモイェード	14.3% (3/21)	(男 2/12 > 女 1/9)
ヤクート	14.3% (1/7)	(男 1/7 > 女 0/0)
ハンティ（オスチャーク）	13.6% (28/206)	(男 14/98 > 女 14/108)
マンシ（ヴォグール）	8.9% (4/45)	(男 0/18 < 女 4/27)
ニヅフ（ギリアーク）	8.7% (2/23)	(男 1/9 > 女 1/14)
チュクチ	6.0% (7/116)	(男 4/49 > 女 3/67)

り、これらとつながりをもっているとみてよいだろう。

抜歯率は、エニセイ川からカニン半島にかけての極北のサモイェード（狩猟・漁撈・トナカイ飼育民）、ハタング川からインディギルカ川の間に住むヤクート（牛・馬・羊の牧畜民）、オビ川中流域のハンティ（オスチャーク、漁撈民）、アムール川下流域のウリチ（漁撈民）は10%台の中ほどである。そして、オビ川西部のマンシ（狩猟・漁撈民）、ユーラシア東端のチュクチ（トナカイ遊牧民）、サハリン北部のニヅフは10%未満でもっとも低い。これを地理的分布でいうと、モンゴル・ブリヤートが中心で、より北のヤクート、北西のハンティ、北東のチュクチにいくと抜歯率は低くなる傾向にあるといえよう。

3 アイヌの抜歯

金関丈夫は北海道アイヌにも陰歯譚（後述）が存在したことを根拠にして、アイヌにもかつては抜歯があったのではないかと予想していた [金関, 1940: 1]。

アイヌが生前にも抜歯をおこなっていた事実は、その後、井上直彦が報告した [井上ほか, 1987]。主として1888年に小金井良精が収集した18～19世紀の人骨 [小金井, 1935]（東京大学総合研究博物館蔵）125体のうち抜歯は19体、15.2%に認められた。抜歯は上下の中切歯と側切歯が主で、上下とも中切歯・側切歯を左右対称的に抜いた例が多い。他に上顎左または右の犬歯を抜いたものが各1例ある。上顎のみ抜歯は男5、女3、不明2、下顎のみ抜歯が男5、女1、上下顎の抜歯が男2、女1であって、男女差はない（表5・8）。抜歯の本数は1本から最多6本で、1人平均は男女とも2.6本であって、男女差はない。分布は北海道のオホーツク海岸と太平洋岸に多く、日本海岸には少ない。千島列島（国後島）、サハリンにも及んでおり、アイヌの間ではかつては普遍的な風習であった可能性がある。注目すべきことは、抜歯は青年30例のうち3例で10.0%、壮年76例中11例で14.5%、熟年10例中2例で20.0%、老年9例中3例で33.3%となっており、年齢の進行とともに抜歯の例数が増える傾向にある点である。性別では、男が66例中11例で16.7%、女が46例中6例で13.0%、不明が13例中2例で15.4%あって、割合だけでは男女差はないようにみえる。

北海道における抜歯の確実な上限は、縄文後期までさかのぼる。その様式は、上顎の左または右

表5 アイヌの抜歯率

日本海岸		2/30 (6.7%)
後志	2I ¹ /2I ₁ 1I ₂ 男1, 2I ₁ 2I ₂ 男1	
太平洋岸		8/49 (16.3%)
日高	2I ₁ 2I ₂ 男1, LI ¹ /?? 1	
十勝	LI ¹ /? 女1, 2I ¹ 男1, LI ¹ /? 女1, RI ₁ 2I ₂ 男1	
釧路	LI ¹ 男1	
根室	RI ¹ 男1	
国後島	RI ₂ 男1	1/11 (9.1%)
オホーツク海岸		7/34 (20.6%)
北見	2I ¹ 男1, RI ¹ 男1, LI ¹ CI 女1, 2I ₁ 女1, RI ¹ CI/LI ₁ I ₂ 男1, 2I ¹ /2I ₁ 2I ₂ 女1	7/36 (19.4%)
サハリン	RI ¹ ? 1, LI ₁ I ₂ 男1, LI ¹ LI ₁ 男1, 2I ₁ 女1	4/47 (8.5%)

の側切歯1本を抜くI様式である。この様式の抜歯は晩期までつづく。しかし、晩期にはすでに抜歯の頻度は低くなっている。続縄文以降から擦文時代にいたるまで抜歯の存在は知られていない。そして、近世アイヌになってふたたび抜歯は現れるが、まったく別の様式であることは上にみたとおりである。

なお、久保寺逸彦は、死後に抜歯する習俗が沙流川付近のアイヌの人々の間にあったことを報告している〔久保寺、1956：96〕。すなわち、「死ぬまで歯が1本も抜けず、歯並が完全な者は、このままでは先祖の許へ行けないとして、上下顎いずれかの歯を1～2本、石で叩いて欠いて埋葬する」という。十勝、音便・伏古での聞き取りである。沙流川アイヌのばあい注目すべきは、亡くなった人の歯ではあるけれども、埋葬時に歯を抜くという点である。これはかつては葬送のさいに生きている人の歯を抜いていたことが変形して残っている可能性を示唆している。すなわち、親や配偶者の死にさいして抜歯していたのが、そうしたことがなく先に亡くなった人のばあいは死後に抜歯したということではないだろうか。しかし、それにしてもアイヌでは抜歯の頻度は低いのに、特定の人に対して歯をくり返し抜いているのは、抜歯になんらかの基準があったことを思わせる。

4 アメリカの抜歯

アメリカで古い時期の抜歯は、ヘリチカの報告から引き出すと、表5のとおりである〔HRDLIČKA, 1940：17～27〕。

もっとも注目すべきはアリューシャン列島カガミル島のマミー洞穴採集の古人骨すなわち「プレーアレウト」の例である〔HRDLIČKA, 1940：18～19〕。抜歯は、93体（男49、女44）のうち40体（男23、女17）、43.0%であって、その頻度は男女ともひじょうに高い。男のほうが抜歯率は高いけれども、男女の差は小さい。それに対して、「アレウト」の抜歯率は、271体（男135、女136）のうち45体（男25、女20）、16.6%で低い。マミー洞穴のミイラの年代が16～18世紀中頃のものだとすると、100～150年前後の間に、アレウトの抜歯の習俗は大幅に衰退したことになる。ただし、ヘリチカは「プレーアレウト」と「アレウト」に分けた基準を、洞穴内での層位のちがいでではなく、頭骨の長頭と短頭のちがいに求め、そのちがいを住民の交替と考えているので、「プレーアレウト」の設定にはアレン マッカートニーらの批判があるという。カガミル島のミイラは捕鯨者または捕鯨に関連して儀礼的な役割を果たした特別な人たちではないか、とスチュアート ヘンリは考えている（スチュアート 教示）。そうだとすれば、アレウトの抜歯はもっぱら捕鯨者たちの習俗であった可能性がでてくる。

アラスカ湾西部のコディアク島の「プレーコニアグ」のばあいは抜歯率は低く7.0%、それより新しいかもしれない「コニアグ」は2.4%でさらに低い。カガミル島とコディアク島とは約1300km離れているけれども、アレウトもコニアグもともに北方の海獣狩猟民である。アレウトの抜歯した人たちが捕鯨者であったとしても、生活様式はコニアグと基本的に同じであろう。抜歯の様式はいずれも、上・下の中・側切歯を抜く一方、犬歯は抜かないという点で共通している。

「プレーアレウト」は、男は上だけ1～4本抜いた例が20例で多く、下だけは2本を抜いた1例のみ、上下あわせて2～3本抜いた例は3例にすぎない。その一方、女は上だけ1～4本抜いた例が9例、下だけ1～2本抜いた例は5例、上・下とも抜いた例が6例であって、男は上が中心、それ

表6 アメリカの抜歯率

ブレーアレウト (カガミル島)	43.0%	40/93	(男23/49 >女17/44)
アレウト	16.6%	45/271	(男25/135 >女20/136)
ブレーコニアグ (コディアク島)	7.0%	14/200	(男 5/67 >女 9/133)
コニアグ	2.4%	2/83	(男 2/51 >女 0/32)
イヌイト (セント-ローレンス島)	5.6%	25/443	(男17/239 >女 8/204)
イヌイト (セント-ローレンス島以外)	2.6%	10/383	(男 4/160 <女 6/223)
アラスカ原住民	3.5%	3/85	(男 0/41 <女 3/44)
ダコタ古墓	10.7%	12/112	(男 7/63 >女 5/49)
オハイオ墳丘墓	4.4%	9/204	(男 7/112 >女 2/92)
白人以前のケンタッキー原住民	4.7%	5/107	(男 4/59 >女 1/48)
先史時代プエブロ (ニューメキシコとアリゾナ)	3.8%	19/500	(男 9/233 >女10/267)
フロリダ古住民	2.8%	19/673	(男13/356 >女 6/317)
アパッチ	12.5%	4/32	(男 2/20 <女 2/12)
シオウ	10.6%	10/94	(男 8/53 >女 2/41)
カリフォルニア原住民	4.3%	28/648	(男11/337 <女17/311)
イロクオイ・ニューヨーク-アルゴンキン	7.7%	2/26	(男 0/12 <女 2/14)
ポトマック川アルゴンキン	4.4%	16/365	(男 7/171 <女 9/194)
メキシコ原住民	9.6%	5/52	(男 3/24 >女 2/28)
古代ベルー	4.0%	143/3600	(男48/1780<女95/1820)

に対して女は上下とも抜いた例が目につく。この傾向は、抜歯率が低い「アレウト」でも変わらない。

イヌイトでは、セント-ローレンス島のばあい、男は上だけ抜いている人が16例でもっとも多く、下だけが6例、上下は1例もない。女は下だけ抜いている人が16例でもっとも多く、上だけは8例で少ない。男女はちょうど逆転する関係にある。この傾向はセント-ローレンス島以外のイヌイトでは、男は一致するけれども、女は上・下それぞれ6例であるので、はっきりしない。

ヘリチカによると、抜歯儀礼の類似性と、広大な同時代性は、アジアとアメリカの原住民を結ぶもう一つの環を形づくっている。アメリカにおけるその習俗は明らかにシベリアよりも遅れるので、移住してきたシベリア集団からもたらされたという [HRDLIČKA, 1940:32]。儀礼的抜歯の意味は、ただ犠牲であって、二次的に忍耐の試験を伴うようになった、とヘリチカは述べている [同前:30]。けれども、その根拠は挙げていない。

アリューシャン列島ウムナク島のチャルカ遺跡から出土した約3500年前の人骨には抜歯の痕跡がないから、アレウトが抜歯の習俗をもつようになったのはそれ以後のことであろう。

北アメリカの原住民 (アメリカ インディアン) の抜歯例は、「白人以前の」や「先史時代の」などの形容詞でヘリチカが表現した古い一群と、そのような形容詞をつけない新しい一群に分けてみると、古・新の2群ともに抜歯している人は全体の3~14%の範囲におさまり、抜歯率に男女の差は見だしにくく、ともに低く、時間的な変化もはっきりしない。抜いている歯は、男女とも上顎は中切歯または側切歯1本だけ抜く例から、中切歯~第1小臼歯まで8本抜く例まであり、下顎は中切歯または側切歯1本抜く例から、中切歯~右の犬歯まで5本を抜いた例がある。上下の歯を抜く例は少ないけれど、そのばあいは上下とも中切歯が多い。抜く本数は1本ずつ増えていく傾

表7 中国新石器時代後期の抜歯 (カッコ内は例数)

	男	n	女	n
1 富 庄	$\begin{array}{c} \text{CII II} \text{ (1)} \\ \downarrow \\ \begin{array}{cc} \text{CII IIC} \text{ (1)} & \text{CII IIC} \text{ (1)} \\ \text{?} & \text{?} \\ \text{I} & \text{I} \end{array} \\ \downarrow \\ \begin{array}{cc} \text{CII IIC} \text{ (1)} & \text{II II} \text{ (3)} \\ \text{II II} & \text{II II} \end{array} \end{array}$	8	$\begin{array}{c} \text{I I} \text{ (3)} \\ \downarrow \\ \text{CII IIC} \text{ (1)} \end{array}$	4
2 三 里 河 I	$\begin{array}{c} \text{I I} \text{ (1)} \end{array}$	2	$\begin{array}{c} \text{I I} \text{ (1)} \end{array}$	1
3 三 里 河 II	$\begin{array}{c} \text{I} \text{ (1)} \\ \downarrow \\ \text{I I} \text{ (2)} \\ \downarrow \\ \text{II II} \text{ (2)} \end{array}$	5	$\begin{array}{c} \text{I I} \text{ (1)} \\ \downarrow \\ \text{II II} \text{ (1)} \end{array}$	2

表8 シベリア諸民族とアイヌの抜歯 (カッコ内は例数)

	男	n	女	n
1 イル ク ー ツ ク 新 石 器	$\begin{array}{c} \text{I I} \text{ (5)} \end{array}$	5/40		0/26
2 オイ ロ ツ カ イ 銅 石	$\begin{array}{c} \text{I I} \text{ (1)} \end{array}$	1/7	$\begin{array}{c} \text{I} \text{ (1)} \end{array}$	1/1

<p>3 モン ゴル</p>	<p>32/106</p>	<p>11/73</p>
<p>4 ブリ ヤ イト</p>	<p>2/28</p>	<p>10/26</p>
<p>5 ハン テイ</p>	<p>16/98</p>	<p>15/108</p>
<p>6 サ モ イ エ ード</p>	<p>2/12</p>	<p>1/9</p>

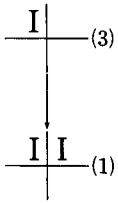
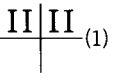
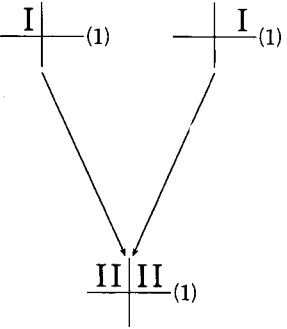
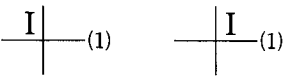
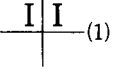
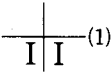
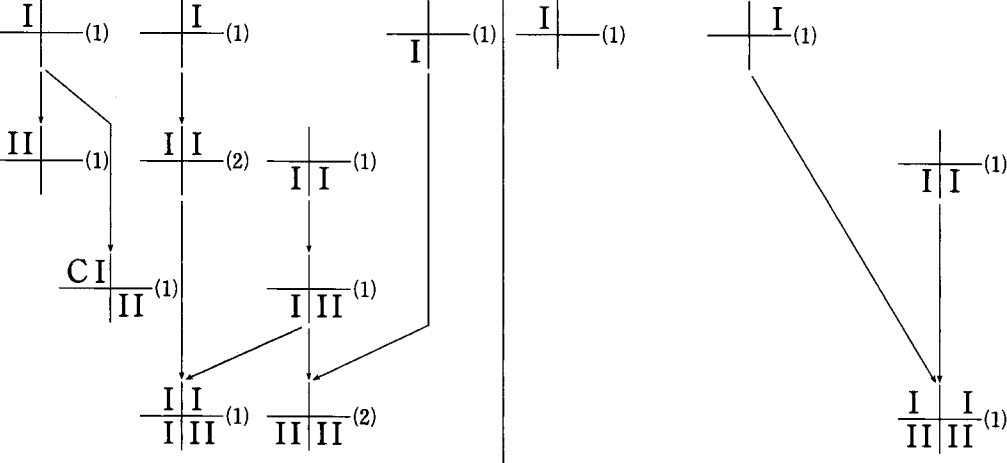
7 マンシ	0/18	4/27 
8 ヤクート	1/7	— 
9 チュクチ	5/49	3/67 
10 ウリチ	1/9	2/15 
11 ニヅヒ	1/9	1/14 
12 サハリンアイヌ	2	1 
13 北海道アイヌ	11	4 

表9 アメリカ諸民族の抜歯 (カッコ内は例数, カッコなしは性不明)

	男	n	女	n
1 フレアアレット		24/49		24/44
2 アレウト		28/135		23/136
3 ブレコニアグ		7/67		15/133
4 コニアグ		2/51		0/32
5 エスキモー(セントローレンス島)		22/239		24/204

6 アラスカエスキモー	<p>5/160</p>	<p>12/223</p>
7 ダコタ古基	<p>7/63</p>	<p>5/49</p>
8 オハイオ墳丘墓	<p>10/112</p>	<p>4/92</p>
9 メキシコ州メキシコ人以前	<p>4/59</p>	<p>1/48</p>
10 先史フェエプロ	<p>11/233</p>	<p>14/267</p>
11 フロリダ古住民	<p>26/356</p>	<p>13/317</p>
12 アラスカ原住民	<p>2/41</p>	<p>3/44</p>
13 アバッチ	<p>2/20</p>	<p>2/12</p>

<p>14 シオウ</p>	<p>8/53</p>	<p>2/41</p>
<p>15 カリフォルニア 原住民</p>	<p>14/337</p>	<p>19/311</p>
<p>16 イロクオイ</p>	<p>0/12</p>	<p>2/14</p>
<p>17 ポトマック 川</p>	<p>8/71</p>	<p>19/194</p>
<p>18 メキシコ インディアン</p>	<p>3/24</p>	<p>2/28</p>
<p>19 古代ペルー 原住民</p>	<p>57/1780</p>	<p>109/1820</p>

向をもっており、一度に例えば4本抜くようなことはなかったらしい。北アメリカでは、抜く対象となる歯、抜歯の本数、男女、時期などによる変化は指摘できない。ダコタの古墓、オハイオの墳丘墓の例は、抜歯している人が墓地のなかでどのような位置を占めているかがわかれば、歯を抜いた人やその意味について考察を進めることができるかもしれない。

5 日本（本州・九州）のI²/I₁様式の抜歯

日本列島のI²/I₁様式は、縄文前期に熊本県轟、広島県太田貝塚にそれぞれ2例あり、その後、本州・九州では古墳時代をもって後を絶つけれども、琉球では数百年まえまでのこっていた。また、北海道アイヌのあいだでは、むしろ数百年前に始まった可能性がよい。

I²/I₁様式の例は、けっして多くはない（表10）。ただし、抜歯の風習が普遍化する以前の縄文中・後期には、熊本から青森までの間に点在し、特に分布の中心を指摘できないことが注意をひく。

縄文時代は男9例、女4例、弥生時代は男4例、女9例、古墳時代は男5例、女4例が報告されている。例が少ないことから事故による折損の可能性も否定するわけにはいかないだけに、男の遺体を納めた石棺内に中切歯1本を副えてあった徳島県内谷例以外は不安がないとはいえない。しかし、いずれの例も歯の咬耗は極端なものではなく、少なくとも歯を道具として使っているうちに抜けてしまったのだろうと単純にはいえない。ここでは一つの様式と認めて考察をすすめていきたい。

縄文時代のばあい、ほとんどの例が下顎の中切歯を中心に一部側切歯を計2～4本抜いている。そのほか、下顎中切歯2本に加えて上顎左右犬歯2本を抜いた例が大分県草木にあるほか、下顎右側切歯1本と上顎右側切歯1本を抜いた例が青森県表館にある。轟、太田、千葉県宮本台以外は出土人骨の数が少ないので、抜歯の頻度を計算しても意味はないだろう。しかし、頻度がはなはだ低いことは確かである。

弥生時代の例では、佐賀県大友遺跡の、下顎の中切歯2本、中・側切歯4本、中・側切歯・犬歯の計6本をそれぞれ抜いた男1、女5、不明1の計7例は、縄文晩期の抜歯様式を継承しているようにみえる。しかし、それまでごく普通に抜いていた上顎の左右犬歯を抜いていないので、下顎の抜歯はそれ以前とまったく意味が異なる可能性がよいと考えたい。大友の例をふくめて、下顎の歯を主に対象にしている抜歯が存在するのであろう。合計では女性例が多いけれども、それは大友遺跡の傾向がそのまま反映しているからであって、他の遺跡ではそうはいえない。それはおそらく西九州の特性ではないかと思う。北部九州では弥生人骨の出土数はおそらく2000体をこえているだろうが、上下の中切歯を抜いた例はきわめて稀である。

古墳時代の例でも、9例のうち男4例が下顎の中切歯を抜いている。女は上顎の中切歯1本抜くのが普通である。

6 琉球の抜歯

琉球列島で最初に報告された抜歯例は、徳之島の喜念の崖下の墓から見つかった下顎骨の中切歯と側切歯を抜いたものである〔三宅、1943〕。上顎はなかったけれども犬歯の抜歯はないとみたほう

表10 日本のI¹/I₂様式抜歯の具体例

縄文時代		
熊本県宇土市轟貝塚	前期	I ₂ 男2
熊本県嘉島町カキワラ貝塚	後期前葉	2I ₁ 2I ₂ 2C ? 1
熊本県五和町(天草島)沖ノ原	後期前葉	2I ₁ 2I ₂ 男1, 女1
大分県朝地町草木洞穴	後期後葉	2C/2I ₂ 女1
福岡県高田村下楠田貝塚	後期	I ¹ ? 1 穿孔
鳥根県美保関町崎ヶ鼻	後期	2I ₁ 男? 1
広島県尾道市太田貝塚	前・中期	2I ₁ 2P ₁ 男1, 2I ₁ 女1
神奈川県横浜市称名寺貝塚	後期	2I ₁ 男1
千葉県松戸市中峠貝塚	中期中ごろ	RI ² /LI ₂ 男1
千葉県船橋市宮本台貝塚	後期前半	2I ₁ RI ₁ 男1
福島県いわき市大畑貝塚	中期	2I ₁ 2I ₂ 男1
宮城県石巻市南境貝塚	中期末	2I ₁ 女1
青森県六ヶ所村表館	後期初	RI ² /RI ₁ 女1
弥生時代		
佐賀県呼子町大友	前・中期	RI ² 2C 女1, RI ₁ 男1, 女1, 2I ₁ 男1, 女1, LI ₂ 男1, 2I ₁ 2I ₂ 女2, 2I ₁ 2I ₂ 2C 女2, ?13歳1, 2C/2I ₁ 2I ₂ 2C 女1
福岡県行橋市前田山	後期	RI ² 女1
福岡県春日市一ノ谷	後期	RI ² /2I ₁ 女1
愛媛県松山市桜谷石棺墓	後期	LC/2I ₁ 2I ₂ 男1
徳島県徳島市三谷	前期	RI ¹ 穿孔
広島県世羅町矢ノ迫	後期	2I ₁ 2I ₂ 男1
古墳時代		
大分県玖珠町塔ノ尾	前・中期	LI ¹ 女1
大分県中津市上ノ原24-1横穴墓	後期	2I ₁ 男1
佐賀県有明町稲佐神社6号石棺墓	前・中期	2I ₁ 男1
福岡県北九州市鴻の巣横穴墓	後期	RI ¹ 男1
福岡県宗像市浦谷C-4-1古墳	後期	LP ¹ /2I ₁ 男1
福岡県甘木市古寺土坑墓	中期	LI ¹ 女1
徳島県名東町内谷石棺墓	前期	I ¹ 女1
山口県美禰市内川石棺墓	前・中期	LI ¹ 女1
山口県下松市山根古墳	前・中期	2I ₁ 2I ₂ 男1

がよい。

1956年には、沖永良部島の西原で採集した人骨に、上顎左右の犬歯を抜いた痕跡があったので、金関丈夫は、「喜念のものは上顎がなく、永良部のものは下顎がないので、同一型式の抜歯であったか否かはわからないが、両者ともに、日本の晩期縄文期から弥生時代にかけての、抜歯型式には、普通にみられる型式である。そして、おそらく、その文化のいまのところでは、南限を画すものであろう。これと台湾の先史時代における抜歯風習との間には、恐らく、直接の関連はないものと考えられる」とした〔金関、1956：16〕。台湾の抜歯は、上顎の左または右の側切歯か犬歯、左右の側切歯または犬歯、あるいは左右の側切歯と犬歯か、左右の犬歯と第1小白歯を抜く型式である。

その後、種子島の広田の砂丘で多数の抜歯人骨が見つかった。それは、喜念とも九州本土とも異なる、上顎の左または右の側切歯か犬歯、または側切歯と犬歯とを抜く非対称型の特徴をもっていた。埋葬人骨は大きく下層・中層と上層に分かれる。前者を2, 3世紀ごろ(弥生後期)、後者を5~8世紀ごろ(古墳中・後期併行)と木下尚子はみている。この様式に属する資料は、その後、同じ種子島の鳥ノ峯や馬毛島の椎ノ木でも発掘された。なお、15~16世紀ごろの種子島の小浜遺跡の人骨5体には、抜歯はなかったから、それ以前に抜歯の習俗は絶えていたのであろう。

1970年代になって新たに知られた縄文晩期から弥生相当期の沖縄本島クマヤー洞穴、真志喜安座間原、渡具知木綿原の人骨には、下顎の中切歯を中心に一部は側切歯まで抜き、さらに一部に上顎の切歯を抜いた例がある一方、上下ともに犬歯の抜去例がない。奄美大島から沖縄の抜歯は、下顎の中・側切歯を主たる対象にしており、他に上顎の中切歯を含む抜去にあることがはっきりしてきた。その特徴は、台湾とも九州本島ともちがいが、奄美から沖縄を独立した地域としてとらえるべきであることを教えている。

そこで、「奄美から沖縄にかけての地域には下顎切歯を中心とした抜歯様式が存在した可能性」を峰和治は考え、沖縄島の港川から発掘された更新世後期の下顎骨にも中切歯2本が欠けていることから、古い抜歯様式が南西諸島では遅くまで残った、と想定した[峰, 1992: 57]。

鹿児島県種子島から沖縄県与那国島までの諸島で知られている抜歯は、奄美大島の下山田、沖縄島の仲宗根遺跡の縄文後期例がもっとも古く、縄文晩期~弥生時代併行期の例がたくさん見つまっている。

与那国島の祖納、桃原および竹富島のヒナイからは、おそらく10世紀以降に属する上顎中切歯2本を抜いた人の頭蓋骨が見つまっている。琉球列島の抜歯の下限はかなり後にあるらしい。ただ

表11 琉球のI¹/I₁様式抜歯の具体例

縄文時代			
沖縄島仲宗根	後期	?/2I ₁ 2I ₂ 1	
沖縄県沖縄島クマヤー洞穴	晩期	?/RI ₁ 男2, ? 1, ?/LI ₁ 男1・女1, 2I ₁ 女1, ?/RI ₂ 男1, ?/RI ₁ 男1, ?/2I ₁ RI ₂ 女1	
沖縄県沖縄島安座真原第1	晩期~弥生前期	LI ₁ 女2, RI ₁ 女1, RI ¹ /RI ₁ 男1	26.6%
鹿児島県奄美大島下山田II	後期	?/2I ₁ 女1	50.0%
鹿児島県種子島長崎鼻	晩期	LI ¹ 男1	
弥生時代			
沖縄県沖縄島木綿原	中期	RI ₁ 男1・女1, 2I ₁ 男1, RI ¹ 男1	30.7%
沖縄県沖縄島大当原貝塚		?/2I ₁ 2I ₂ 2	
沖縄県沖縄島大原貝塚		2I ¹ ? 1	
沖縄県沖縄島古座間味貝塚		?/2I ₁ 2I ₂ 3	
鹿児島県徳之島喜念	中期	?/2I ₁ 1, ?/RI ₁ 男1, ?/LI ₁ 男1	100.0%
鹿児島県徳之島西ミヤド		2I ₁ 1	
古代~近世			
沖縄県与那国島桃原		RI ¹ ?/? 1, RI ² ?/? 1	
沖縄県与那国島祖納		2I ₁ 女1	
沖縄県竹富島ヒナイ		2I ¹ 男1	

表12 縄文～古墳時代のI¹/I₂様式の抜歯 (性を書いていない例は性不明)

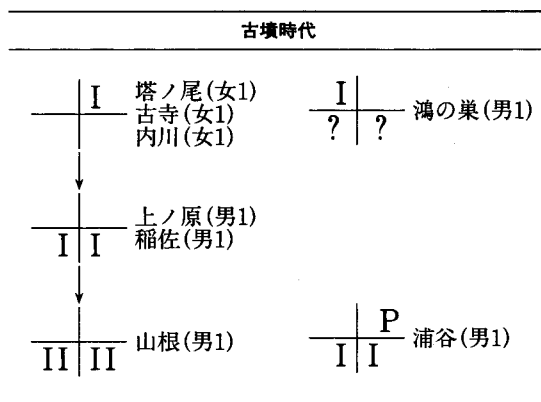
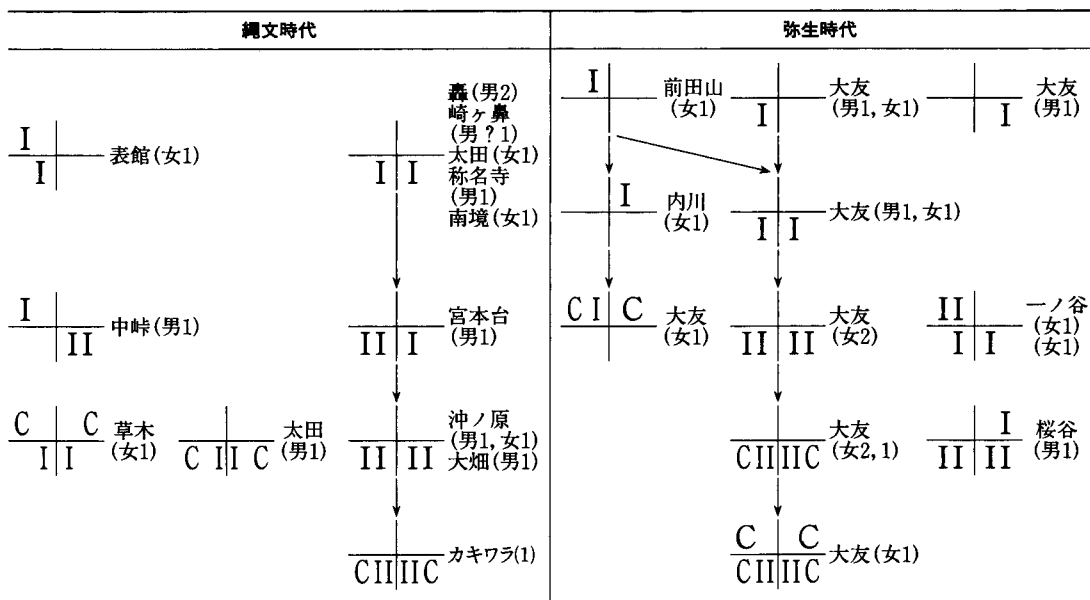
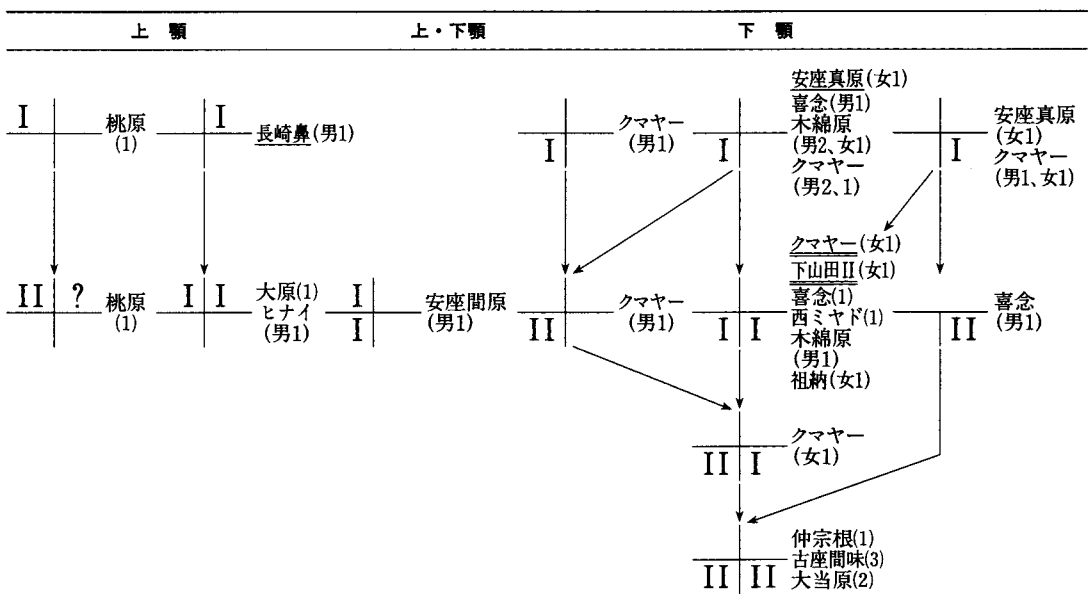


表13 琉球のI¹/I₂様式の抜歯 (ゴチック体は縄文時代, 性を書いていない例は性不明)



し、波照間島の大泊浜貝塚の11～12世紀ごろの女性人骨1体および近くの砂取場出土の約10体には抜歯はなかった。頻度は低いのであろう。

琉球の抜歯は、縄文後期から近世にいたるまで男には上顎のみ(2例)、下顎のみ(3例)、上下とも(1例)のいずれもあるけれども、女には下顎のみ(6例)しかないのが一つの特徴である。上顎の抜歯は少なく、下顎の抜歯が多い特徴は、上顎不明または下顎不明、性不明の例を含めて、上顎の抜歯が5例に対して下顎の抜歯は27例、上下の抜歯は1例という数字にもよく表れている(表11・13)。

1人あたりの抜歯本数は、1本14例、2本11例、4本6例であって、下顎を1～2本抜くというばあいが多い。しかし、弥生時代併行期の沖縄島の古座間味貝塚と大当原貝塚では、抜歯した5例はすべて下顎の中・側切歯4本を抜いている。一度に4本抜いたというより、何回か抜く機会があって最終的に4本に達したと考えたほうがよいだろう。

7 ポリネシアの抜歯

ハワイの抜歯は、近親者が亡くなったときに、服喪の一形式として断・剃髪、火傷、裂・刺傷などと合わせて、哀悼の意味をもたせておこなったものである。ポリネシアの哀悼傷身の風習については大林太良がまとめており[大林, 1970: 275～281]、その後、石川栄吉も詳しく述べている[石川, 1985: 358]。それらを参照しながら、ポリネシアにおける哀悼の抜歯について概観しておく。

キャプテン クックは第3回目の太平洋航海のとき、1778年にハワイ諸島(カウアイ, ニイハウ, マウイ, ハワイ島)を訪れている。クックの部下であったデイヴィッド サムウエルによると、ハワイでは首長や自分の親族が亡くなった際に、上下の前歯を打ち欠くのが習いであった、という[BEAGLEHOLE(ed), 1967: 1041]。しかし、1822～1824年にハワイに滞在したイギリスのキリスト教伝道師ウィリアム エリスによると、欠歯するのは首長が死んだときであった。欠歯は男が多かったが、女がするばあいもあった。また、首長も自分の親族や友人が亡くなったときには歯を欠き、

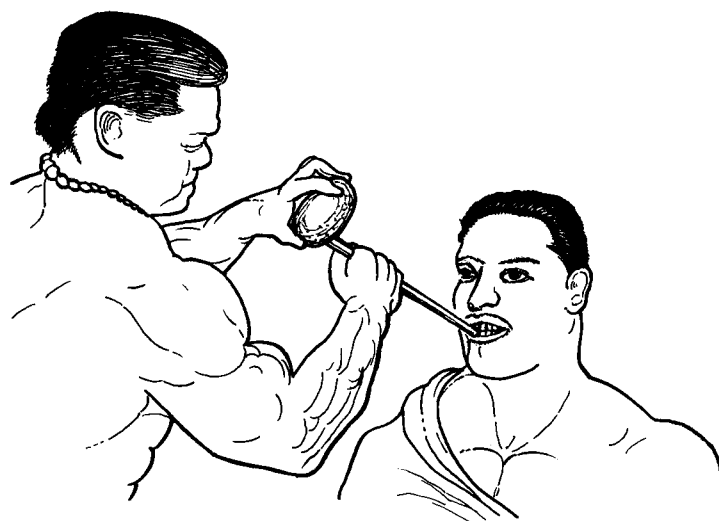


図6 ハワイ人の抜歯の方法 [PIETRUSEWSKY & DOUGLAS, 1993]

首長の従者たちもそれに従った、という。取り去る歯に木の棒を当てて石でたたいて打ち欠くようにして歯を除く(図6)ので、歯槽に歯根をのこす頻度が高い(島らが調べた抜歯例のうち約半数)[島ほか, 1968:57]。英語ではtooth knockingと表現し、石川栄吉は抜歯ではなく欠歯の語を使っている。1回に打ち欠くのは、たいていのばあい、前歯1本だけであつたけれども、すべての首長が死亡するたびに歯を欠いたので、キリスト教が導入される以前のハワイでは、歯が完全に揃った成人を見ることは稀であつたという[ELLIS, 1839 (1969:174~182)]。

ところが、江戸時代、1839~40年に越中富山の長者丸にのってハワイに漂着した次郎吉は、「サンイチ」従前ノ教は其宗ニ帰スレハ先下ノ前歯二枚ヲ撃落シ、神ニ誓フ、男女然リ。欠歯ノ徒甚繁也。米利堅^{メリケン}ヨリ嚴ニ禁スレトモ尚止ズ」と陳述している[古賀, 1968:265]。これが事実だとすれば、「サンイチ」=サンドウィッチ島すなわちハワイでは、抜歯は哀悼のためだけでなく、一種の入社式にさいしてもおこなつたことになる。しかし、ハワイに長期滞在したヨーロッパ人が、抜歯の理由に哀悼だけをあげているのも不可解である。

18, 9世紀のポリネシアでは、哀悼傷身の習俗が盛行していた。その一つとしての抜歯は、西部ポリネシアではトンガ諸島、北部クック諸島ではトンガレヴァ島、南部クック諸島ではラロトンガ島にあつたことがわかっている。

トンガ諸島では、親族の死に際して、自分の歯を石で打ち欠いた、という[BEAGLEHOLE (ed.), 1967:167]。18世紀の記録である。

ラロトンガ島でも、親族の死に際して前歯を幾本か欠いた、とフレイザーは20世紀初めに記録している[フレイザー, 1918]。

また、大林・石川の論文には掲げていないけれども、マルケサス諸島のファツヒヴァ島にも哀悼抜歯があつたことを、イエーリングが1881年に書いている[ヤーリング(杉本訳), 1985:150]。

これらポリネシアの哀悼傷身の抜歯は、距離的には離れた島に分布していても、起源は一つで相互に関連をもっていたことは確かであろう。打ち欠いた「前歯」がどの歯であつたかは、ハワイ諸島で発掘した人骨によって証明することができる。

ハワイの抜歯の習俗について、形質人類学の立場から最初にまとめたのはH.G.チャペルである。彼は、ビショップ博物館蔵の古人骨を調べ、男性98体のうち22体(22.4%)、女性70体のうち7体(10%)に抜歯を認め、女性よりも男性にさかんな習俗であること、ハワイ島は他の島よりも流行していることを指摘している[CHAPPEL, 1927:5]。

その後、島五郎・鈴木誠もビショップ博物館蔵の頭骨資料について詳しく報告している。彼らは、15, 6世紀から18世紀前半とされるオアフ島のモカブ出土の人骨には、男女計286体(男139, 女性147)のうち男性1体に抜歯は認めただけであつた。そして、モカブ頭骨を除いたオアフ島の206体(男124, 女82)には計42体(男27, 女15)、20.3%(男21.7%, 女18.2%)に抜歯の痕跡を認めた[島・鈴木, 1968]。文献記録から18世紀後半から19世紀中ごろのハワイ諸島に抜歯がさかんであつたことは明らかであるから、オアフ島の抜歯はモカブより遅れて18世紀中ごろに初現を求めべきなのであろう。

抜歯の様式は、男には上顎の歯のみを抜いたもの、下顎の歯だけを抜いたもの、上・下顎の歯を抜いたものいずれもあるけれども、女には下顎の歯を抜いたものだけがある(表14)。エリスによ

表14 ハワイ諸島の抜歯 (カッコ内は例数)

男 性		n	女 性		n
		48			27

れば、首長が亡くなったときに女は歯を抜いたというから、それを下顎の歯と考えるならば、上顎の歯は親や配偶者が亡くなったときに男だけが抜いたことになる。下顎の抜歯本数は少ない例で2本、多い例は6本である。3本という奇数例があるので、1本ずつ抜いたとすれば、4本抜いている人は4人の死に際して1本ずつ抜いていったと考えることもできるけれども、最初に2本を抜き、次に1本または2本抜いた可能性も否定できない。6本の歯を欠失している女は3、4人の首長の死に遭遇したのであろうか。その一方、男の上顎の抜歯は2～4本である。1、2～3、4人の親族の死が訪れたのであろう。

ハワイの抜歯についてはその後、ハワイ島のアネホオマルやマウイ島のホノカフアなどから発掘された古人骨を調べた M. ピエトルゼフスキーと M. ダグラスが、文献記録も援用して総括的な論文にまとめ、哀悼抜歯が始まった時期や、さかんになった理由についても述べている。

彼らによると、1700年以前のオアフ島の初期の諸遺跡から出土した人骨には抜歯は見当たらず、白人との接触期以降の人骨に抜歯の痕跡を見いだすことができる。抜歯の習俗は、おそらくアリ(首長)、ことにカメハメハ王 I 世の権力の高まりと、1700年代末から1800年代初めにおきた島嶼間の征服戦争に伴って発達したものである。戦いは支配者たちの多数を死に至らしめた。ハワイ島とオアフ島に哀悼抜歯の習俗がさかんであるのは、これらの島の支配者たちがハワイの権力の座についていたからである。哀悼抜歯の習俗が、ハワイの先史時代でも遅い時期に現れるのは、よそからもたらされたものであることを示唆する。しかし、これまでに調べたトンガ、シガトカ、フィジーの古人骨には抜歯例がないので、その源がどこであったのか推測することはできない、という [PIETRUSEWSKY and DOUGLAS, 1993: 268~269]。

ハワイ島のカラニオプウ大首長が亡くなり、ハワイ島が内戦状態に入ったのが1782年、カメハメハ王 I 世王朝の成立が1795年、カメハメハ I 世によるハワイ諸島の統一が1810年のことである [石川, 1984: 98]。クックとサムウェルがハワイ島に到着したのはハワイ島が内戦に入る直前、エリス

表15 ポリネシアの抜歯率

ハワイ島 (ハワイ諸島)	18~19世紀前半	35/95	(男16/57 <女19/38)	36.8%
アナエホオマル		22/50	(男12/28 <女10/22)	44.0%
アウハウケアエ		1/11	(男 1/4 >女 0/7)	9.1%
オアフ島 (同)		42/206	(男27/124 >女15/82)	20.4%
ワイアナエ		3/24	(男 1/11 <女 2/13)	12.5%
カカアコ		4/14	(男 3/7 >女 1/7)	28.6%
ラナイ島 (同)		8/69	(男 7/37 >女 1/32)	11.6%
ラナイ		4/83	(男 4/48 >女 0/35)	4.8%
カウアイ島 (同)		6/33	(男 5/17 >女 1/16)	18.2%
ケオネロア		2/24	(男 1/9 >女 1/15)	8.3%
モロカイ島 (同)		5/32	(男 5/21 >女 0/11)	15.6%
モロカイ		2/5	(男 2/2 >女 0/3)	40.0%
マウイ島 (同)		3/9	(男 2/7 <女 1/2)	33.3%
ホノカフア		17/331	(男 7/114 >女10/217)	5.1%
ファツヒヴァ島(マルケサス諸島)	19世紀			
トンガ島 (トンガ諸島)	19世紀			
ラロトンガ島(南部クック諸島)	19世紀			
バーガ諸島	19世紀			
トンガレヴァ島 (ベンリーン島, 北部クック諸島)	19~20世紀			
ラクタ諸島	19世紀			

がハワイ島を訪ねたのはハワイ諸島統一後であった。クックがハワイ諸島を訪れた1778年当時、すでに哀悼抜歯の習俗があった。すなわち、カラニオプウ大首長在世時から大小多数の首長が勢力を競い合っており、互いに対立抗争をくり返し、戦死者をだし、遺族は哀悼の意を表して抜歯していた。ハワイ諸島の哀悼抜歯は18世紀の中ごろないし前半までさかのぼる、と推測できる。

なお、トンガ島にかつて抜歯が存在したことは、さきに紹介したとおりである。ピエトルゼフスキーらが調べたトンガ島の人骨は、時期が古いのかもしれない。ポリネシアの哀悼傷身について、ポリネシアを東部と西部とに分けてその違いを明らかにした石川栄吉は、「元来ポリネシアの古い文化伝統に抜歯は属しながら、何らかの理由で消滅が早かった」と予想する [石川, 1985: 365~366]。しかし、17世紀以前の人骨に抜歯の痕跡がないとすれば、哀悼抜歯はむしろ新しい習俗に属しており、ポリネシア全域に十分に広まらないうちに消滅した可能性を考えなければならないだろう。

ハワイ諸島では、「歯が完全に揃った成人を見ることは稀であった」とエリスはいい、「欠歯ノ徒甚繁也」と次郎吉はいう。しかし、抜歯率はハワイ島36.8%、オアフ島20.4%であって、彼らが感じたほどにはその頻度は高くない (表15)。ポリネシアの哀悼抜歯は、首長を頂点とする上位の人々の間での風習であったと考えるほかない。

③……………哀悼抜歯の意義

1 I²/I₁I₂様式抜歯の諸型式とその分布

今回取りあげたI²/I₁I₂様式とは、下顎の中切歯・側切歯を主に、上顎の中切歯・側切歯をも抜く諸型式の総称である(図1・2・5)。これまで見つかっている個々の抜歯の例をあげていくと、膨大な種類になるので、以下のように、これらの諸形式を34種類に整理し、さらに14の型式に統合しておくことにしたい。なお、上下の犬歯と第1・第2小白歯の抜歯は例数が少ないので、煩雑になるのを避けるために、ここでは除いてある。

A 上顎の切歯(I¹, I²)を抜く

1 I¹型

— I —, — I —, — II —

2 I²型

I — —, — — I, I — — I

3 I¹I²型

— II, II —, — III, III —, I — II, II — I, III

B 下顎の切歯(I₁, I₂)を抜く

4 I₁型

— I —, — I —, — II —

5 I₂型

I — —, — — I, I — — I

6 I₁I₂型

— II, II —, — III, III —, I — II, II — I, III

C 上下の切歯を抜く(それぞれの型式の中でもっともたくさん抜いた例だけを示す)

7 I¹/I₁型

— II — / — II —

8 I¹/I₁I₂型

— II — / III

9 I¹/I₂型

— II — / I — — I

10 I²/I₁型

I — — I / — II —

11 I²/I₂型

I — — I / I — — I

12 I²/I₁I₂型

I — — I / III

13 I²/I₁型

 IIII/—II—
14 I²/I₂型

IIII/IIII

I²/I₂様式を構成する基本型式を上記のように分類したばあい、それぞれの型式のアジア・ポリネシア・アメリカにおける分布は、表16のとおりである。

2 I²/I₂様式抜歯の目的

哀悼抜歯の起源 抜歯の目的が哀悼にあることがわかっているのは、16～18世紀の中国、18～19世紀のハワイ諸島などポリネシア、4～6世紀の日本だけである。

ポリネシアの抜歯は前述のように、哀悼傷身の習俗の一部であって、断・剃髪、火傷、裂・刺傷、入れ墨と組合わさっている [石川, 1985: 365]。ピエトルゼフスキーらによれば、1700年代になってからハワイの抜歯は始まるという。抜歯は首長や親族・友人が亡くなったときにおこなう、とサムウェルはいい、エリスは首長が亡くなったばあいだけだという。ハワイの抜歯は、男のばあいは上顎のみ、下顎のみ、上下顎のいずれもあるが、女のばあいは下顎だけである。これは哀悼対象の違いを反映していると考えてよいだろう。しかし、これまで出土人骨との対応関係は誰も追究していない。18世紀のハワイは首長層と平民からなる階層社会であった。ハワイで抜歯をさかんにおこなっていたときでも、抜歯率は50%を切っていた。首長の死にさいして、亡き首長に対する哀悼の意をつよく示さなければならなかったのは、首長層を中心に亡き首長に近かった従者たちであって、ひろく平民一般までおよぶ習俗ではなかったと考えておきたい。

ポリネシア以外で哀悼傷身の抜歯が存在したことがわかっているのは、中国であって、文字による記録がのこっている。宋代、12世紀末の『谿蛮叢笑』に、「狔狔妻女年十五六、敲去右辺上一齒」とある。上顎右（それとも正面から見て左か）の側切歯1本をたたいてグラグラにしたあと抜き取ったと解すれば、片側だけの抜歯である。ところが、明代、16世紀に田汝成が書いた『炎徼紀聞』には、四川省に住んでいた人たち（僂佬か）が「父母死、則子婦各折其二齒、投之棺中、以贈永訣也」とある。また、清代、17世紀後半～18世紀初めに陸次雲が記した『峒谿織志』には、貴州省の「有打牙狔狔、父母死、子婦各折二齒投棺中」とある。18世紀後半に書かれた『大清一統志』巻391にも、貴州省の「打牙狔狔……、父母死、子婦各折二齒、納諸棺中、以為永訣」とあり、その内容は『炎徼紀聞』とよく似ている。「子婦」は、「子女」のように娘だけをさすこともあるが、金関丈夫は“children of the family”と英訳しており [KANASEKI, 1960: 202]、息子と娘と解釈している。惜しいことに、哀悼の抜歯がどの歯であったかの記述は古文獻にはない。

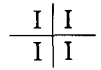
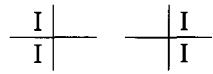
明代中期、15～16世紀の抜歯は、四川省洛表で発掘した男女10体のうち6体（男3、女3）に認められている。すべて上顎の両側切歯を抜いた2I²型である。これが『炎徼紀聞』にみえる哀悼抜歯だったとすれば、抜く歯は同じ側切歯であったとしても、僂佬の間では、明代には抜歯の理由が変わっていたことになる。宋・明・清代の僂佬は、「子婦」を対象にした抜歯として説明している。洛表の抜歯例は男を含んでいる事実から、『谿蛮叢笑』にある成女式のとときの抜歯では説明できない。抜歯が全体の60%に達している点と合わせ、哀悼抜歯である可能性を考えたほうがよいの

表16 I^2/I_1I_2 様式の抜歯 (△は男, ○は女, □は性不明)

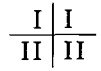
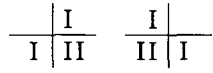
	縄文	弥生	古墳	琉球(古)	琉球(新)	ポリネシア	中国(古)	中国(新)	モンゴル	シベリア(古)	シベリア(新)	アイヌ	北米(古)	北米(新)	ペルー(古)	
A 上顎の切歯を抜く																
1 I^1 型																
$I \mid$			△ ○	△			△		△ ○	○	△ ○	△ ○	△ ○	△ ○	△ ○	
$I \mid I$				△	□	△	○	△	△ ○	△	△ ○	△	△ ○	△ ○	△ ○	
2 I^2 型																
$I \mid$		△	△ ○				△		△ ○		○	△ ○				○
$I \mid I$	△						△ ○						△	△		○
3 I^1I^2 型																
$II \mid$							△ ○		△	△	△ ○	△	△ ○	△ ○	△ ○	△ ○
$II \mid I$						△							△ ○	△ ○	△ ○	△ ○
$II \mid II$						△			△		△ ○		△ ○	△ ○	△ ○	△ ○
B 下顎の切歯を抜く																
4 I_1 型																
$I \mid$		△ ○		△ ○			△	△	△				○	○	○	○
$I \mid I$	△ ○	△ ○	△	△ ○		△ ○	△	△	△ ○		△ ○	○	△ ○	○	△ ○	△ ○
5 I_2 型																
$I \mid$			△									△ ○	○			○
6 I_1I_2 型																
$II \mid I$	△			○		△ ○			△ ○		○	△			△ ○	△ ○
$II \mid II$	△ ○	○	△	○		△ ○	△	△			○	△	○	△ ○	△ ○	△ ○

C 上下の切歯を抜く

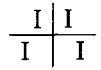
7 I¹/I₁型



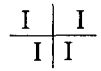
8 I¹/I₁I₂型



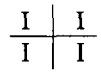
9 I¹/I₂型



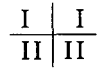
10 I²/I₁型



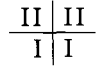
11 I²/I₂型



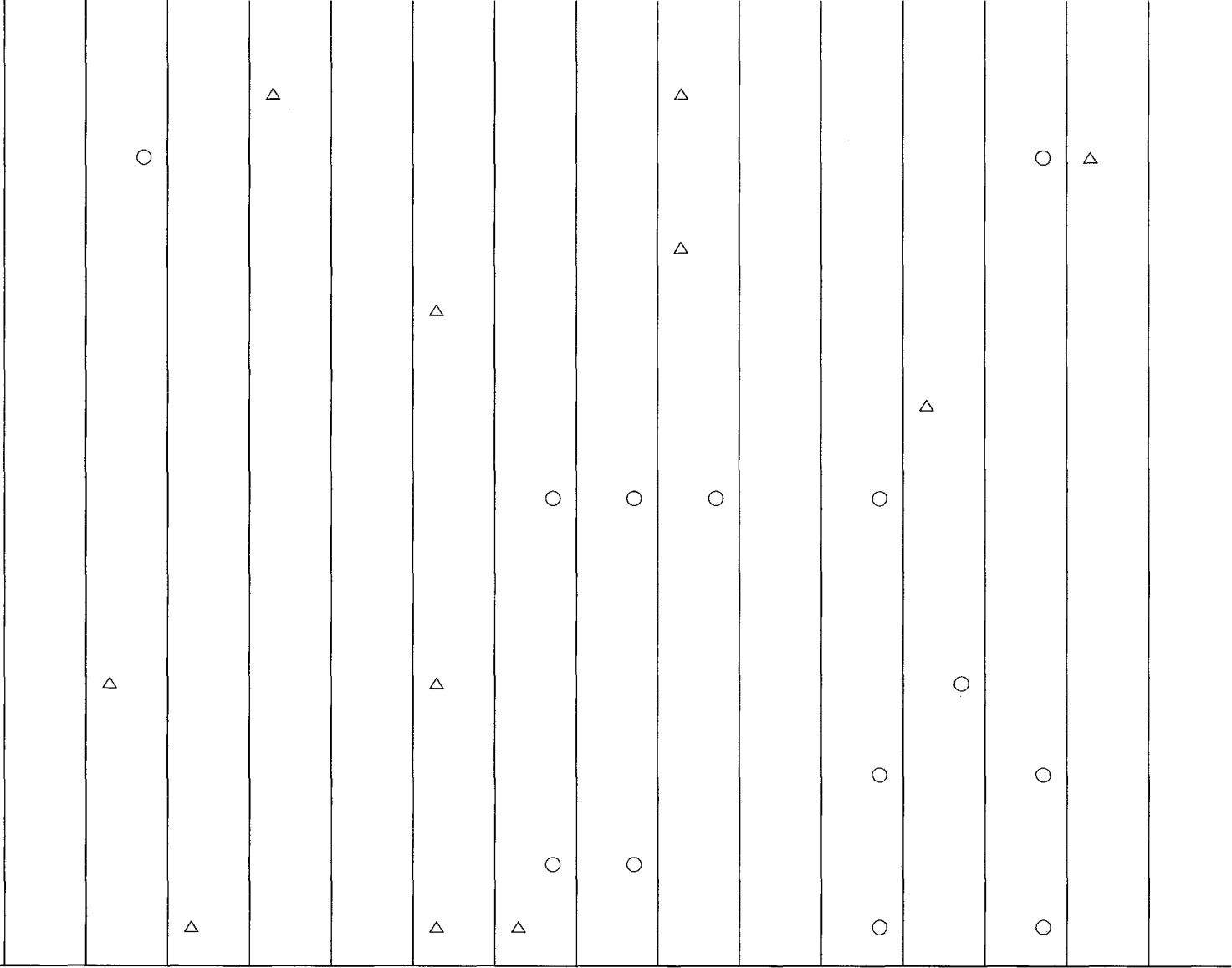
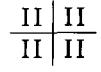
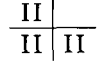
12 I²/I₁I₂型



13 I¹I²/I₁型



14 I¹I²/I₁I₂型



であろう。『炎徼紀聞』・『峒谿織志』ともに、父母が亡くなった時に各々2本の歯を折って棺のなかに入れたとある。このとおりだとすれば、4本の歯を欠いた人が少なくないと思われるけれども、発掘例ではすべて2本だけである。父または母のいずれかが亡くなったときだけか、それとも1回に抜くのは1本だけであったか、どちらかなのであろう。

その一方、明・清代の僂佬は、抜歯の理由を、「夫家を傷つけるを恐れると俗に謂う」と説明している(図7)。「夫家」は、夫の大事なモノのことであってそれを傷つけないように歯を抜くのだ、という金関丈夫の解釈は、陰歯譚(Dentes vaginae)から導きだしたものである。陰歯とは、若い女の陰部に生えている歯のことで、その話は、結婚したところその歯が新夫のモノを噛みきって夫を死なせたので、彼女が眠っているときに、親がその歯を取り除き、それからは幸せな結婚生活をおくった、という内容である⁽³⁾。

陰歯譚は、北・中・南アメリカ、東シベリア、中部アジア、台湾を含む東南アジアに広がっており、日本にもわずかながら分布している[金関、1976:262~277]。この話がいつ成立したのかは、よくわかっていない。しかし、抜歯した古人骨の時期のほうがはるかに古い。文献には、たとえば呉代、約1700年前に「夷州の俗、女はすでに嫁げば、皆な前上の一歯を欠去す」(『臨海水土志』)とある。夷州すなわち台湾の原住民の間では、既婚の女のしるしと説明しているばあいがある。けれども、陰歯譚は、そのはるか以前から存在した抜歯習俗を背景にして生まれた俗説の一つであって、これを根拠にして抜歯は女だけの習俗であるとすることはできない。女の愛嬌を増すため、と



図7 中国・僂佬の抜歯の情景(「女将嫁 先折去門牙二齒 恐妨夫家所謂鑿齒之民也」と説明している。『苗蛮図』, 18世紀)

聞き取りした研究者に答えた台湾のタイヤル族やツォウ族のばあいは、男もまた抜歯していたし、そもそも、卑南・円山文化（4000年前）以来、20世紀にいたるまで、台湾原住民は男女とも2本ないしそれ以上を抜歯する風習をもっていたからである。

さきに中国の抜歯が、山東省では、大汶口文化晩期末に上顎左右の側切歯を抜くI²様式が途絶え、新たに上・下顎の中・側切歯を抜くI²/I₂様式へと変遷することを述べた。その一方、中国の文献記録では、成人・婚姻抜歯が早くからあり、哀悼抜歯は四川省や貴州省で明代になって初めてその存在を確認することができる。しかし、実際には哀悼抜歯の出現は、I²/I₂様式が突然現れる大汶口文化晩期末ないし龍山文化の初めの時期までさかのぼらせて考えるのが妥当であろう。あるいは、山東省へのI²/I₂様式の突然の出現には、他地方からの影響があったのかもしれない。安徽省の富庄遺跡の大汶口文化[?]には、上・下顎の中・側切歯の抜去が主であり、10代後半ですでに6～10本もの歯を抜いている。成年式でこれだけの本数の抜歯は考えにくいとすれば、この地方では早くからI²/I₂様式の抜歯すなわち哀悼抜歯の風習をもっていた可能性がある。中国の哀悼抜歯は、内陸部の安徽省付近で大汶口文化期に誕生したのであろうか。

哀悼抜歯の習俗は日本にもあった。徳島県名西町内谷の石棺墓（4世紀）には、熟年男性の人骨に熟年女性の上顎中切歯1本を伴った。調査にあたった鈴木尚は、男性の死に関連してその妻または近親者が抜歯して納棺したものと推定している [鈴木, 1962: 114～115]。

その後、奈良県広陵町^{うぶの}於古墳（6世紀初め）の中央棺では、成年男性[?]1人、小児2人の合葬に、壮年の上顎右第1小臼歯1本が伴った例が見つかり、宮川徳が私見を引いて哀悼抜歯の可能性を考えた [宮川, 1974: 129～156]。

内谷石棺墓と於古墳のばあひ、抜いた歯を死者と同じ棺のなかに入れてあったことは、抜いた歯を死者に捧げたことを示す何よりの証拠となる。抜歯の風習は世界的な広がりをもつにもかかわらず、抜いた歯をどう処置したのかの情報はきわめて少ない。考古資料では内谷と於の例、文献資料では、棺中に投じる仵佬の例は、死者に対する哀悼の意をあらわすもっとも原初的な形を示していると考えてよい。

哀悼断髪と殉死 『日本書紀』孝徳天皇大化2年の条に記された薄葬の詔には「凡そ人死亡ぬる時に、若しは自^{おのれ}を^{わな}経^{したが}きて^{した}殉^{くび}い、或いは人を絞^{あながち}りて^{しに}殉^{たる}わしめ、強^ひに^{ひと}亡^に人の馬を殉^にわしめ、或いは亡人の為^もに宝を墓^もに蔵^めめ、或いは亡人の為^もに、髪^{おさ}を断^きり股^{もも}を刺^しして誅^しす。此の如き旧俗、一^もらに皆^も悉^{ことごと}に断^やめよ」とあり、殉死の禁止とならべて髪を切り太股を刺して哀悼することを禁じている。哀悼傷身の習俗は、7世紀におそらく近畿地方を中心にして存在したのであろう。なお、『令集解』の註に、「信濃国俗、夫死者^お即^お以^お婦^お為^お殉^お」とあるのを、「此頃まで此風の時に遺存したの事実」 [小松, 1922: 16] と解釈すれば、その範囲はさらに広がるだろう。

古墳時代に髪を切って棺に納める風習があった事実は、茨城県大平町にある6世紀の七廻り鏡塚古墳で確認されている (図8)。遺体を納めた舟形木棺に、副葬品だけをいれた小形の組み合わせ式木棺が伴い、後者の中には、20×30cmの箱の中にかくしこんだかのように納めた「若い年齢」の「男性の疑いがもたれる」長さ40～50cmの頭髪がのこっていた。舟形木棺内の男性の遺体は、頭部から歯は見つかったけれども、頭骨と頭髪は見当たらなかったため、両者とも分解して消失した可能性を鈴木尚は考え、「この頭髪が副葬品を収めた組み合わせ木棺から発見されたことは、むし

ろ遺体とは別の個体に属する頭髪が副葬されたと考えたほうが、より妥当ではないか」とした。さらに、この頭髪には毛根がついているから、「頭皮の一部を切って副葬した」のか、と鈴木は疑っている [鈴木ほか, 1974: 104~105]。そうだとすれば、「耳から耳まで一条の皮を剥ぎとって、服喪の表象となした」というローマ時代のケルギスの例 [江上, 1951: 146] を想起させる。しかし、18世紀初めのオビ川流域のハンティ (オスチャーク) は頭髪を抜き取って死者の上に散じたという [同前: 148] から、毛根がついているのは抜き取った可能性も考えておいたほうがよいだろう。いずれにせよ、すさまじいまでの哀悼の表現である。

葬送にあたって頭髪を切って死者に副えた実物資料としては、モンゴルのノイン・ウラ6号墓の墓室内に多数のこっていた匈奴の弁髪(トボヤ)の例が著名である (図9) [梅原, 1960: 22, 図版82・83]。

頭髪の副葬に関連しそうな日本の資料は、古墳時代の棺内に副葬してある多量の縦櫛(トボヤ)であろう。大阪府高槻市の土保山古墳の主棺から見つかった櫛は、遺体の頭辺に7個、下肢辺に4個、南隅に12個あり、さらに棺外に35個の櫛がのこっており、計58個の多きに達した (図10)。「頭辺の櫛は実際に髪につけていたとしても、その他のものは、棺外から流入した可能性もある」という [原口, 1973: 66]。その大きさは、頭部の幅が3cmの大形のものから、幅6mmの小形のものまで大小さまざまであって、小形品のなかには実用性を疑わせるものがあった。あるいは一部副葬用の小形模造品(ミニチュア)を含んでいるのであろうか。いずれにせよ、多数の人の頭につけていた櫛またはその模造品を副葬してあったという点は動かない。頭髪は残っていなかったけれども、大形の櫛は、元々は切った頭髪につけてあったのではないだろうか。そうでなければ、櫛をもって断髪(トボヤ)の象徴として棺内外に投じたのであろう。土保山古墳は5世紀中ごろの古墳である。このような櫛の大量副葬例は、滋賀県八日市市雪野山古墳(22個)を最古として、東京都世田谷区野毛大塚古墳(30個以上)を東限、宮崎県延岡市浄土寺山古墳(48個)を西限として4~6世紀の古墳に広くみることができる。このころ本州・四国・九州に哀悼断髪(トボヤ)の習俗があったことを示唆する貴重な例であろう。

哀悼傷身と哭泣 魏志倭人伝には「始め死するや停喪十余日。時に当たりて肉を食わず、喪主は哭泣し、他人は就きて歌舞飲酒す」とある。ここで注意すべきは「哭泣」の語である。ユーラシア大陸では、匈奴が「号哭し、或いは面を擽(く)き血を流すに至る」(『後漢書』耿秉伝、突厥(トクツク)が「刀を以て面を擽(く)き、且つ哭す、血涙俱に流る」(『北史』突厥伝)、女真(リョウミン)が「擽(く)面慟哭す」(『遼史天祚帝紀])、白韃靼(トコタン)すなわち汪古は「父母の喪に遇えば、則ちその面を擽(く)きて哭す」(『蒙鞮備録])とある [江上, 1951: 144~146] ように、「哭泣」には、顔を傷つけて血を流す行為を伴っている。さきの薄葬の詔を参考にすれば、3世紀の倭人の社会でも、喪にさいして、喪主はただ声をあげて泣いたのではなく、髪を切ったり我が身を傷つけて泣いた可能性が⁽⁴⁾つよい。

魏志倭人伝には、卑弥呼が亡くなったときに「葬に殉ずる者、奴婢百余人」とある。『日本書紀』(垂仁28年条)には、ヤマトヒコの命が亡くなり、埋葬したさいに、近しい者をみな生きながら陵域に埋めたところ、数日たっても死なず、昼夜泣きうめいた、と記す。日葉酢媛陵に殉死に代えて埴輪をたてたという記事(垂仁32年条)も、殉葬と号泣の出来事が合体してできた説話とみることも可能であろう。

日本の古代に馬の殉殺を認めた松井章らは、人の殉葬も存在したことを、6世紀の千葉県佐倉市

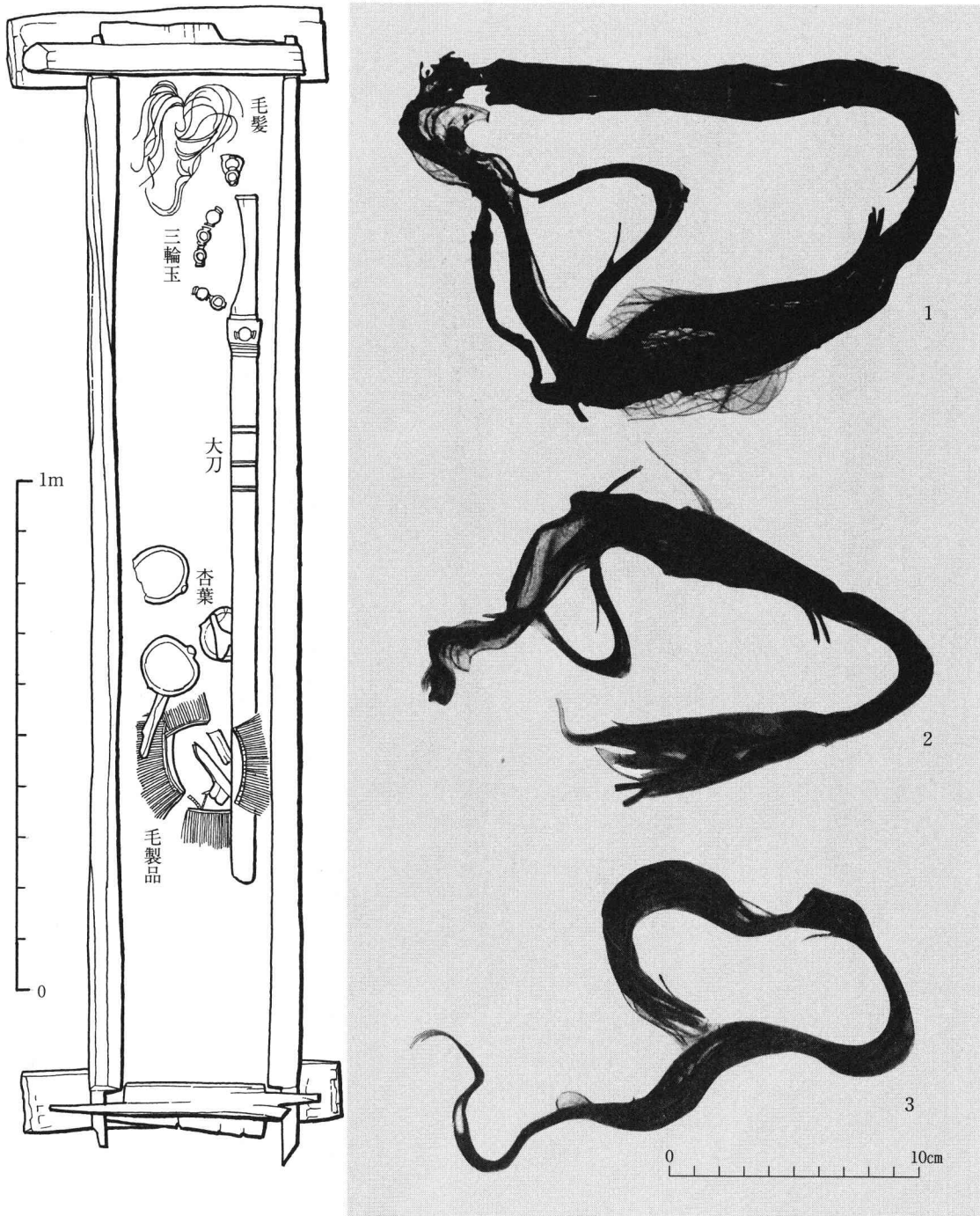


図8 栃木県七廻り鏡塚古墳の頭髪とその出土状態 [大和久編, 1974]

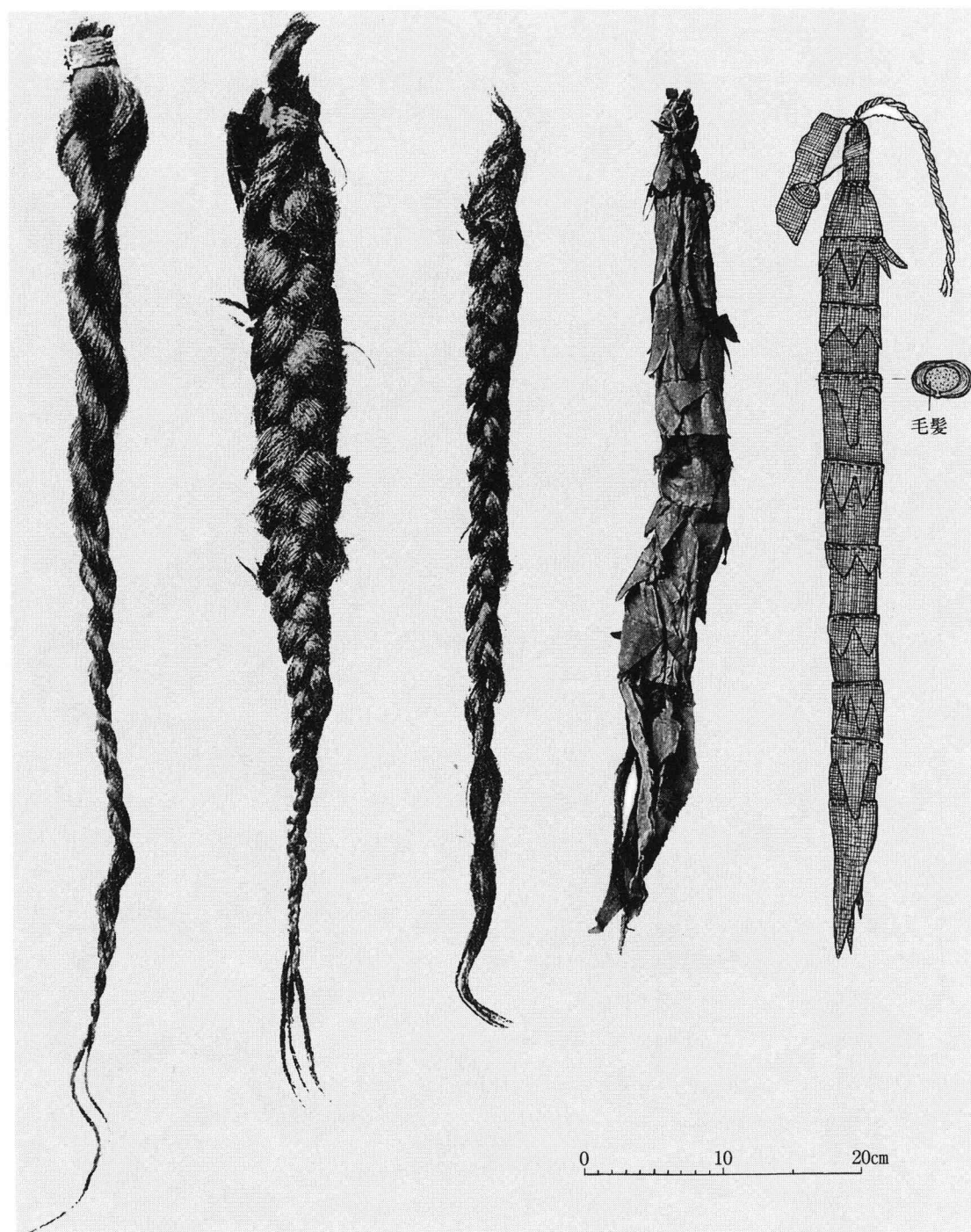


図9 蒙古ノイン・ウラ6号墓に副葬してあった弁髪（右端は絹で包んである）[梅原，1960]

大作18号墳，同31号墳や5世紀の鳥取県羽合町長瀬高浜7号墳などで発掘された周溝外あるいは周溝内の土坑墓など，さらには各地の埴輪棺などをあげて，その可能性を考えている [松井・神谷，1994：87～90]。哭泣・断髪・殉葬という哀悼習俗の脈絡のなかでみると，3世紀に哀悼の抜歯があってもおかしくない。確実な実例としては，4世紀の徳島県内谷古墳と6世紀の奈良県於古墳を挙げうるにとどまるけれども，古墳時代の抜歯人骨のうち，上下の中・側切歯を抜いた例の多く，そして同じ歯を抜いた弥生時代のIT₁/L₁様式の抜歯もまた，親族の葬送のさいに哀悼の意味であったと解釈してよいのではあるまいか。

さて，哀悼抜歯の習俗があるところには，哀悼のための断・剃髪，傷身，殉死をしばしば伴い，哀悼習俗の複合体をつくっている [大林，1970：262～281]。ユーラシア大陸ではハンティ，蒙古(匈奴)，ポリネシアではハワイ，パラトンガ，サモア，トンガ，マルケサスがそうである。

北海道アイヌも，「父母之喪莫有服制。唯其兄弟若叔姪，抽刀外刃，互擊其額流血被面」(新井白石『蝦夷志』1720年)，「親兄弟妻子等死失の時に太刀刃物の峰にて大勢相互に額を打ち合せ血を出す也。相互に血を見ざれば止めず血の出るを待って止る也」(最上常矩『蝦夷草紙』1790年)と記されているように，傷面・流血の習俗をもっている。日高や胆振のアイヌでは，夫を喪った寡婦は前頭部あるいは耳の辺またはその他の髪を短く切った。また，北見や釧路では，誰か家族の者が亡くなったばあいに，その遺族または近親者が葬式を済ませた後に，頭を洗い，髪を手入れし，顔を剃り，身を浄めた [児玉ほか，1941：59]。アイヌの抜歯で注目すべきは，頻度が全体の15.2%で低いことである。このことから，抜歯と成年式や婚姻との関係は否定できるだろう。重要な点は，抜歯の例数が年をとるにつれて増えていく事実である。アイヌが哀悼の傷面や断髪・流血の習俗をもっていたこととあわせ，アイヌの抜歯もこれらと一連の関係をもつ哀悼傷身の習俗の一部であったと推定しておきたい。

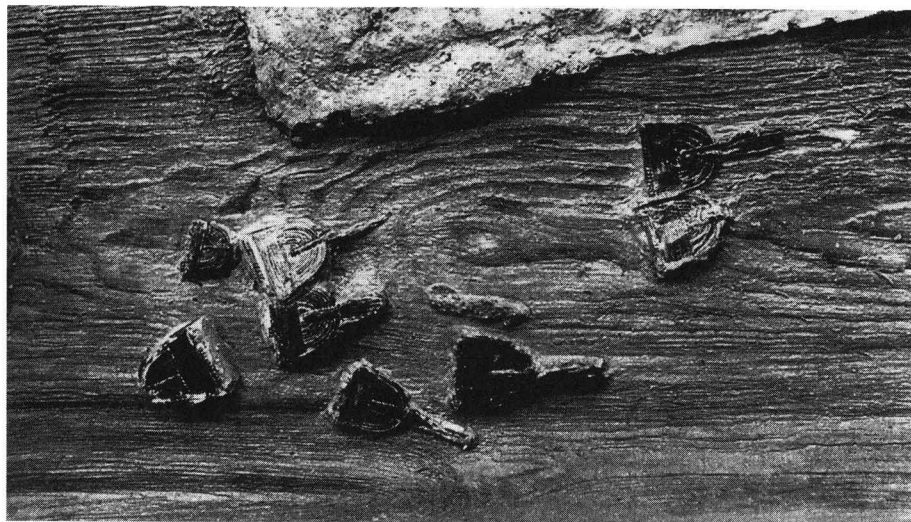


図10 大阪府土保山古墳主槨の棺内の足辺にのこっていた櫛 (歯は欠失) [原口，1973]

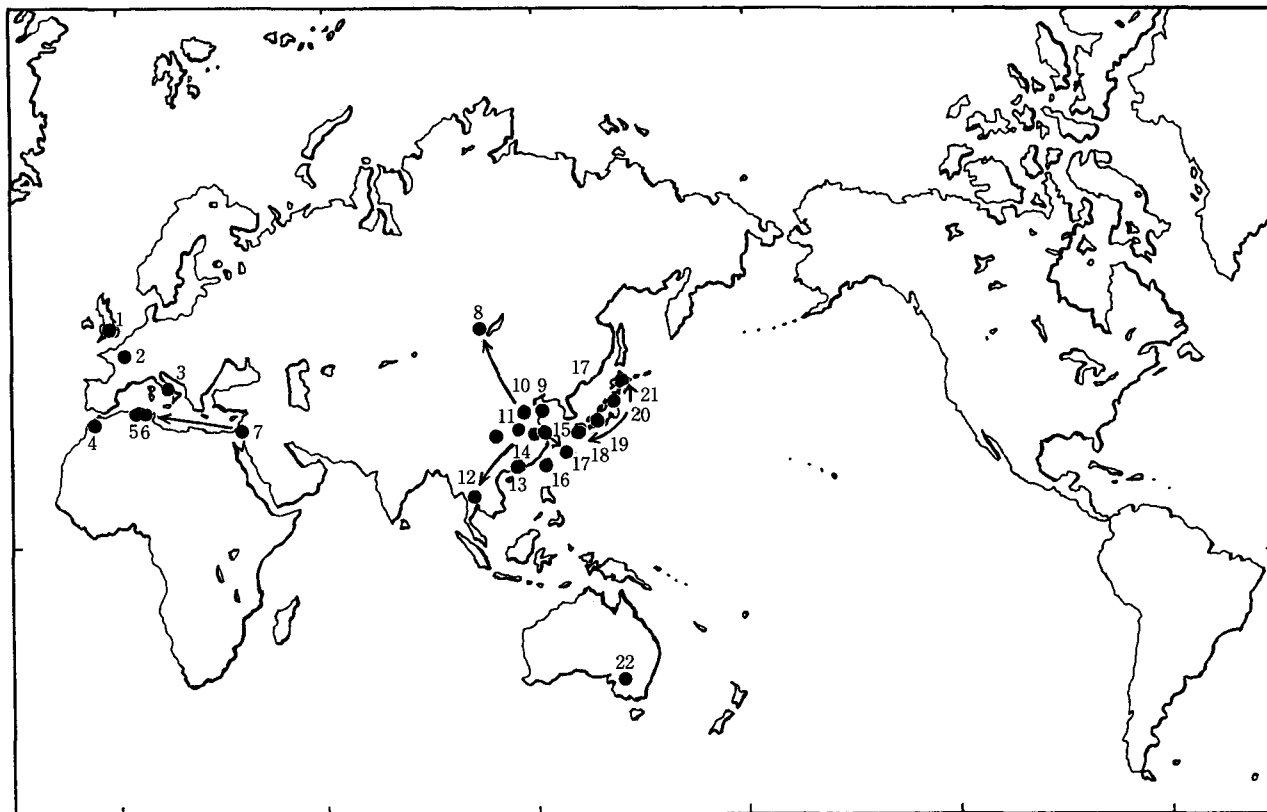


図11 中石器・新石器時代の抜歯習俗の分布と伝播

- 1 ドッグホールズ, 2 ヴォーデンクール, 3 カラ コロンボ, 4 メッシュェタ エル アルビ, 5 アファルー プールンメル, 6 タホルルト, 7 エル ワド, 8 イルクーツク, 9 三里河, 10 大汶口, 11 富庄, 12 パンカオ, 13 河宕, 14 圩墩, 15 崧沢, 16 卑南, 17 クマヤー, 18 轟, 19 太田, 20 青島, 21 コタン温泉, 22 ニッチェ湖

3 哀悼抜歯の発生と各地への拡散

II²/LI₂様式の抜歯は、アフリカやオーストラリアにも分布している。これらの地方の一部に今世紀までのこっていた2I²型、2LI₁型、2LI₂2LI₂型の抜歯は、7、8歳から16歳の間におこなう成年式の一環であって、一集団内の抜歯の頻度は高く、抜歯の本数は2本または4本で、その型式は単純である。同じようにII²/LI₂様式の抜歯であっても、哀悼傷身の風習とは関係がない場合である。

その一方、アジア、アメリカ、ポリネシアのII²/LI₂様式の抜歯は、頻度は低く、一部の人がたくさんのお歯を抜いており、その型式は多様である。その分布と時期は、哀悼傷身の発達と重なりあっている。II²/LI₂様式の抜歯は多元的に発生したのか、それとも一元的に発生し世界各地へ伝播していったのか。この問題は本来ならば、それぞれの民族同士の人的・文化的交流を跡づけたうえで議論すべきことであろう。しかし、そのような作業を進めることができるほど、抜歯関係の資料は豊かな情報を伴っていない。出土状況、年代、文献記録が正確にわからない資料が大部分なのである。ここでは細かな議論は省略して、あえて臆測を示しておきたい。

アジア・アメリカ・ポリネシアのうち、地理的にも時間的にも近いばあいは、抜歯型式が共通するのであれば、一方から他方への伝播を考えてもよいだろう。しかし、地理的にも時間的にも離れているばあいは、伝播かそれとも多元発生と考えてよいかどうかの判断は容易でない。もちろん、各地・各時期の資料が揃っているならば証明可能であろうが、現状ではそれはまったく期待できない。とりあえずここでは地理的・時間的に近い地域間同士を比較して考えてみよう。

アジア・アメリカ・ポリネシアの抜歯習俗は地理的な連続性から、中国・シベリアからアメリカ

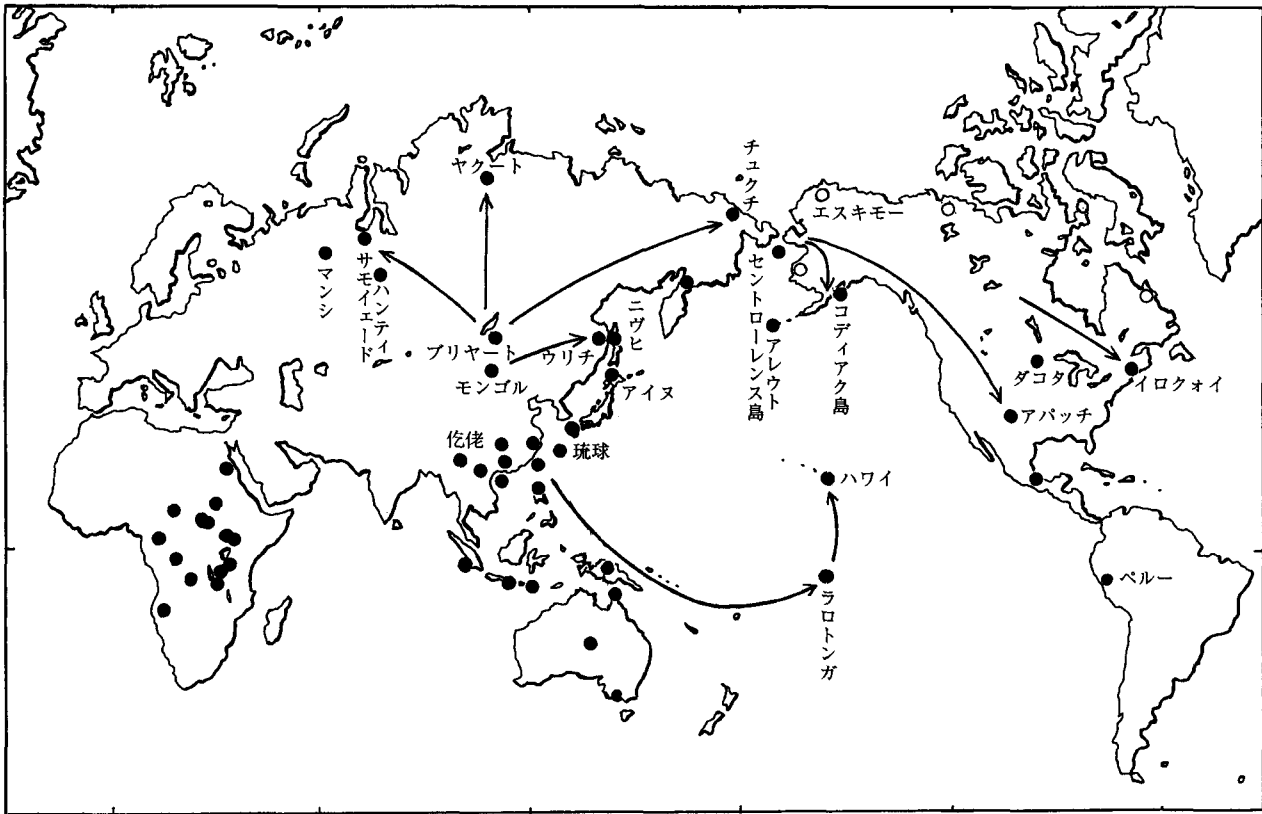
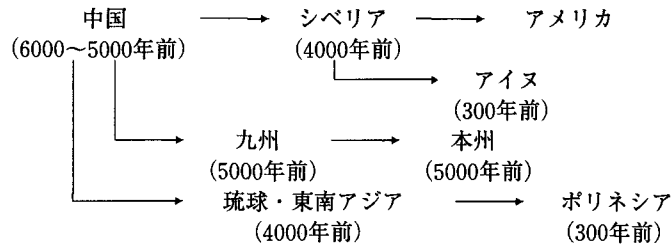


図12 15世紀以降の抜歯の分布と伝播経路（推定）



への広がり、中国から東南アジア・ポリネシアへの広がりの大きく二つの流れに整理することができる。

I¹/I²様式の抜歯すなわち哀悼抜歯の起源が、6000～5000年前の中国の安徽省、江蘇省から山東省付近にあったことは、まず動かない。中国新石器時代の大汶口文化～龍山文化とシベリアのイルクーツ地方の新石器時代の抜歯は、時間的に近い。抜歯型式は、シベリアは上顎の中切歯1～2本を抜くという点で、中国の三里河Iの一部とは共通する。しかし、中国の富庄とくらべるとはるかに簡素であるから、簡略化した型式であるといえるかもしれない。中国・シベリア間には関係があると認めておきたい（図11）。中国北部からモンゴルを経てシベリアのイルクーツ地方へ伝わったのは4000年前としておこう。そこから一波はアムール川流域へ伝わり、サハリンから北海道アイヌへと伝わる。その時期は、アイヌ以前の擦文文化の時期の抜歯例がまだ知られていないから、1000年前までさかのぼることはないだろう。そして、もう一波は極北へ伝わり、ヤクート、チュクチが受け入れる。そこからさらに、ベーリング海峡を渡ってアメリカ大陸に到達し、イヌイト（エスキモー）、「プレアレウト」、「プレコニアグ」に伝わる。イヌイトに伝わった哀悼抜歯の風習は、さらに南下してアメリカ南部の原住民まで広がった（図12）。

その一方、中国北部から別の一波は早い時期、4000年前ごろに中国南部の広東省に伝わる。そこから貴州省・四川省へと伝わるけれども、その時期は1000年前より新しいかもしれない。

日本の九州・本州の哀悼抜歯の風習も中国東南部から伝わったとすれば、その時期は早く、5000年前の縄文時代前・中期のころである。そして、古墳時代までつづく。琉球列島へは、九州または中国東南部から4000年前の縄文後期に伝わる。そして、その後、3000年間あまりこの風習はつづく。中国の商王朝の人々は、貨幣的な意味をもつ威信財としてタカラガイを使っていた。タカラガイは中国本土では産出せず、海南島、台湾、琉球列島の海岸でのみ採取可能であった。そこで商王朝は琉球列島をきわめて魅力のある島々とみており、その貝殻を入手するために中国の人々が渡航しただろう、と木下尚子はいう [木下, 1998: 16~19]。そうであれば、哀悼抜歯もその流れにのって琉球列島や九州に伝来したのかもしれない。

ポリネシアへは、やはり中国東南部ないし琉球列島からニューギニア、メラネシアの島々を伝い、トンガ諸島、ラロトンガ島、マルケサス諸島などを経て、ハワイ諸島にまで伝わる。ハワイ諸島にアジア系住民が到着したのは、おおよそ1700年前くらいのことと推定されている。しかし、同じアジア系の抜歯の風習を採用したのは、つい300年ほど前のことであった。

4 哀悼抜歯の意義

死者と哀悼者 哀悼傷身とは、「ある個人の死に当たり、その遺族ないし臣下などが、みずからの身体ことに顔や胸などを傷つけて哀悼の意あるいは服喪の意をあらわす習俗」のことである [大林, 1987: 3]。

首長や親族が亡くなったときに、自発的に自分の身を傷つけて極度の悲しみの感情をあらわす18世紀のトンガ島の哀悼傷身は、全身血だるまになるまで刃物で体のあちこちを突き刺す、激烈なものであった。キャプテン クックは島民にのこっている深い傷痕を見て、最初は、それを戦いで受けた傷かと思った、という [石川, 1985: 349]。島民は自分の内腿、両脇腹、腋の下、頬に槍を突き刺した、とクックに同行したジェームズ キングは記している [同前]。一歩まちがえば死につながる危険な儀礼であった。抜歯のばあいも口中、血だらけになったことだろう。このことから、大量の血を流す傷身や抜歯は、殉死の簡略型ないしは代替型と考えることもできる。殉死して同時に埋葬してもらう代わりに、流した血、切った髪や抜いた歯を死者に供え副葬するのであろう。

ハワイ王国第2代の国王カメハメハ2世の王母が亡くなったとき、口中を血だらけにして舌に入れ墨していた若い王妃は、「痛くはないか」と宣教師のエリスが訊くと、「とても痛いわ。でも、私の愛情のほうがかもっと大きい」、と答えた。哀悼のために舌に入れ墨をすることに対して、「これは決して消えないし、消されもしないからだ」と他の人々は説明した、という [同前: 360]。

哀悼傷身は、亡くなった首長や親族と自分との関係をもう一度確認し、彼らのことをいかに深く思っていたかを体を張ってあらわす場となる。首長が亡くなったときに島民が抜歯したというハワイやトンガのばあい、その行為は、亡き首長に対する尊敬や忠誠の気持ちを生きている人たちにあらわす機会となり、次の首長に対するそれにもなった。抜歯も故人に対する単なる哀悼の表現にとどまらず、地位・名誉の顕彰と結びついて生者に対して社会に対して哀悼の気持ちを見せ示す二次的な意味をもって発達することになったのである⁽⁵⁾ [石川, 1985: 363~364]。

哀悼傷身はユーラシア古代北方民族の間でも、著しく発達した習俗であった。たとえば、スキタイ(前9～前3世紀)の王が亡くなると、臣下の者は耳の一部を切り取り、頭髪を丸く剃り落とし、両腕に切り傷をつけ、額と鼻を搔きむしり、左手を矢で貫いた、とヘロドトスは前5世紀に記述している[ヘロドトス(松平訳, 1972:中43), 前430ごろ]。人の葬送にさいして、髪を切り、耳を截ち、顔面を傷つけて、流血・号泣する行為は、匈奴(1～2世紀)、突厥(6～7世紀)、女真(10～17世紀)、フン(4世紀)、ホータン(前2世紀以前～11世紀)などでも、しばしば組合わさって一つの習俗となっていた[江上, 1951:144～148]。ハンティ(オスチャーク)は、父か母、あるいは夫、あるいは家族の一員が死ぬと、「血のついた髪を死者の上に投げる」と19世紀にノヴィッキーが伝えているように、髪をひきむしって、顔をひっかいて血だらけになった[ハルヴァ(田中訳), 1971:269]。ハンティは、歯を抜いた数百年前の人骨がのこっているから、それに抜歯が加わっていた可能性がある。

死者と哀悼者との関係を日本・アジア・ポリネシアでみると表17のとおりである。

ユーラシア北方民族の^{りめん}傷面(傷面)、^{せつじ}截耳、断髪などの哀悼傷身が死者と葬者といかなる関係にあったかについて、江上波夫は二大別して、「その一は、血縁殊に親子の関係の場合」で、「その二は、上長、殊に君主に対する場合」であるとしている[江上, 1951:150]。

アメリカ・シベリアの抜歯の機会やその意味については、抜いている歯が中国と共通し、頻度が50%を切っているという点から、中国から伝来した哀悼抜歯であると考えたけれども、その証明ができていない。そこで、さらに考察をすすめてみたい。

アメリカでもっとも抜歯の頻度が高かったアレウトの社会は、首長とその一族、貴族(戦士、偉業をなしとげた人々からなる)、平民(社会的にこれといった貢献をしていない人々からなる)、奴隷(戦争捕虜や身寄りのない孤児からなる)の三つの階層に分かれていた。三者の比率は貴族が圧倒的に多く、その次に奴隷が多く、貴族と平民の間では移動が頻繁におこったらしい。夫が亡くなった時に、妻または近い親族が殉死した例もある。特に首長の死に際してお気に入りの妻を殺して首長が生前に寝ていた場所の近くにカゴに納めて、天井から吊すこともあった。また、奴隷を殺して主人の墓に入れることはかなり一般的な風習であった。集落間の戦争も島と島の間でのアレウトの戦争は盛んであった。また、アレウトはコディアク島のエスキモーの集落をよく襲い、捕虜を連れ帰った。戦死者の遺体は万難を排して自分たちの集落に運び、その地位にふさわしい葬送の儀式をおこなった、という[ラフリン(スチュアート訳), 1986:279～283]。ハワイ諸島と似たような状況があったように見える。遺体をミイラにしてのこす理由は、「死者に対する惜愛の情がつよく、なるべく長く死者と別れたくなかったこと」[スチュアート, 1987:89]、すなわち死者哀悼の気持ちがつよかったところにあり、特に殉死の習俗の存在は、哀悼抜歯との関係で注意すべきことである。

ここで、北方民族の抜歯のうち、例数が多い「プレーアレウト」, 「アレウト」, イヌイト(セントローレンス島)、ハンティ、モンゴルを選び、上顎、下顎、上下顎に分けてどちらの顎の歯をもっぱら抜いているかを示し、さらにハワイのばあいと比較して考えてみよう(表18)。

プレーアレウト、アレウト、イヌイト(セントローレンス島)、ハンティ、モンゴルにおいては、イヌイトに下顎の切歯を抜いた女が多いのを唯一の例外として、それ以外では男女とも抜いている歯は上顎の切歯が圧倒的に多い。ハワイでは、首長が亡くなったときに抜くのは男女とも下顎の歯

表17 死者と哀悼者の関係

	死者	哀悼者	断・剃髪	傷身	截耳	抜齒
[日本列島]						
北海道アイヌ (18世紀)	死者	遺族, 近親者	○	○		(○)
日本 (4~7世紀)	死者		○	○		(○)
[ユーラシア北方民族]						
匈奴 (1~2世紀)	後漢の將軍	南单于国が国を挙げて			○	
匈奴 (前4~後2世紀)		葬送者			○	
突厥 (6~8世紀)	死者	子孫および親属の男女			○	
突厥 (8世紀)	唐の玄宗	突厥・回紇などの蕃官四百余人		○	○	
女真 (10~17世紀)	天祚帝	衆			○	
白韃靼(汪古, 15~17世紀)	父母	子			○	
フン (4世紀)	父母	子			○	
チェルケッス	親	子			○	
	父母	子	○		○	
于闐 (ホータン)			○		○	
スキタイ(前9~前3世紀)	王	皆	○	○	○	
ハンティ (18世紀)			○	○	○	(○)
[ポリネシア]						
ハワイ (18~19世紀)	首長	島民	○	○		○
	王母	首長連中, 王妃				○
トンガ	最高の神聖首長	首長連中, 全住民	○	○	○	○
	首長	島民すべて	○	○	○	○
	親族	島民の親族	○	○	○	○
	友人	島民の友人	○	○	○	○
サモア	首長		○	○		○
	家族	家族のおとなたち		○		○
ロツマ	首長	寡婦		○	○	
	妻	夫			○	
ブカブカ	首長			○		
	親族	遠近の親族		○		
カピングマランギ	親族	親族の男女				
ティコピア	親族	親族	○	○		
	夫	妻	○	○		
	妻	夫	○	○		
ソサイエティ	首長	妻		○		
	親族	親族の男女		○		
	愛児	両親		○		
マルケサス諸島	夫	妻		○		○
マンガイア島	親族	親族	○	○		
トンガレヴァ島	親族	親族		○		
ニュージーランド(マオリ)	夫	妻	○	○		
	親族	親族の男女	○	○		
	友人	友人	○	○		

表18 北方民族の抜歯とハワイの抜歯との比較

	男			女		
	上	下	上下	上	下	上下
「ブレイアレット」	20	1	3	10	7	7
「アレット」	23	2	3	20	2	1
イヌイト	16	6	0	8	16	0
ハンティ	12	2	2	14	1	0
モンゴル	22	3	7	7	4	0
ハワイ	3	27	18	0	26	1

で、男の上顎の歯は親や配偶者が亡くなったときに抜いた。ハワイのばあいを参考にすれば、アメリカ、シベリア、モンゴルでは、首長が亡くなったときにその一族の男女が上顎の歯を抜いたと推定できる。1人あたりの抜歯の本数が、少ない人から多い人までまちまちであるのは、その人物の社会的地位や年齢と関係があるのだろうか。ヘリチカの「ブレイアレット」「アレット」の区分を認めるとすれば、「アレット」の抜歯率16.0%が「ブレイアレット」の43.0%とくらべると著しく低下しているのは、その間にカガミル島のアレット社会に大きな変動があったことに起因しているであろう。

さて、人が亡くなったさいの号哭は、死者の靈魂をこの世に呼び戻すための呪術に起源する、とレヴィ・ブリュルは説明する [レヴィ・ブリュル (山田訳), 1953: 下, 107~108]。その呪術が、後に自から儀礼化し、喪葬のさいに哭泣するようになった、と江上波夫は考えている [江上, 1951: 154]。その一方、傷身は流血を招く。流血は、服喪者が自分の血液を死者に捧げる意味をもち、第一義的には殉死の形式化したものであって、第二義的には傷をつけて流血し、併せて号哭することによって、死者蘇生の呪術的行為を儀礼化し、哀悼の情を痛切に表明した、と解釈することができる [同前: 154~155]。

哀悼抜歯と社会 日本の哀悼抜歯の意味は何であろうか。

土肥直美・田中良之は、西日本の古墳時代の抜歯例を集成して、この時代に中小首長の間で、「服喪抜歯」が存在したと考えている [土肥・田中, 1988: 210~212]。一つの古墳に埋葬した数人のうちで抜歯された人物は、もっとも豊富な副葬品をもっていたり、墓地の中心に埋葬してあったり、その古墳に最初に埋葬された人物であった。そこで抜歯を施された人は、男女を問わず家族集団を代表する家長であったと推定し、古墳時代の「服喪抜歯」の意味は、「家長権の継承に伴う、いわば相続儀礼」である、と土肥らは結論づけている。次代の家長が喪主になって家族を代表して抜歯するという考えである。

抜歯した24例 (男13, 女11) のうち、抜いた歯の数は1本が17例 (男7, 女10), 2本が4例 (男3, 女1), 3本が1例 (男1), 4本が1例 (男1) となっている。2本のばあい、左側切歯と右第1小臼歯、左右の犬歯というように隣接していない例は、抜歯の機会が2回にわたったと推定してよいだろう。とすると、古墳時代の抜歯は、ただ1回の「家長権の相続儀礼」だけでは説明できないことになる。犬歯、側切歯、第1小臼歯などを抜いているのも問題になろう。抜歯が「相続儀礼」の意味をもっているばあいがあったとしても、相続後もその人だけは喪主になって何回も歯を

抜くことがあったと考えるべきである。そのばあい、抜歯の本数が男に多いのは、男の中小首長が喪主になって彼の親族の死にさいして歯を抜くことが多かったことを示唆しているのであろう。

IF/II₂様式の抜歯を哀悼抜歯と考えるならば、その始まりは中国やシベリアでは新石器時代、日本では縄文時代までさかのぼることになる。この時代に親族（あるいは首長）の死にさいして歯を抜いて深い哀悼の意を表さなければならなかったのは、どういうところから始まったのであろうか。抜歯したのは全員ではないから、首長の死にさいして集団をあげて抜歯したということはあるえない。もっとも近い人1～2名が代表して抜歯して哀悼の意をあらわした、と考えるべきなのであろう。「近い」の度合いは、その社会の親族組織や社会組織によって決まる。抜歯の頻度が平均的に低いにもかかわらず、1人あたりの抜歯の本数が多いのは、特定の人が歯を抜く機会が多かったこと、つまり特定の身分、地位、階層に属する者が哀悼抜歯を許されていたことを暗示する。

内谷古墳では、小首長である男性の墓に女性の中切歯1本を入れてあった。どちらも熟年であったという点を参考にすれば、父の棺に娘の歯を抜いて納めたのではなく、夫の棺に妻の歯を抜いて棺内に入れた蓋然性のほうが高い。それはおそらく夫婦合葬または親子合葬の意味を象徴的にあらわしたのであろう。於古墳のばあいも、1本の歯は女性と考えるならば、夫婦・親子合葬の意味をもつことになる。しかし、哀悼する相手が夫にせよ中小首長にせよ、彼らとの関係で抜歯したとすれば、縄文～弥生時代の例、琉球の例とも、あまりにも件数が少ない。死者に対する哀悼抜歯の習俗がひろく存在していたとしても、何らかの基準があり、あるいは特別な事情が介在してはじめて抜歯にいたると考えるほかない。

歯は、ものを食べるのに必要な器官の一つである。その一部を抜いて死者に捧げるのは、指や耳を切って死者への犠牲として捧げるのと同じ意味であって、身体の器官の切除しやすい一部分をもって全身の犠牲に代えるという殉死を簡便化もしくは象徴化した考えにほかならない。歯を故意に抜くと、非常な痛みを味わうと同時に、大量の出血を伴う。我が身に傷をつけて哀悼の意をあらわすときと同じである。苦痛は哭泣をひきおこす効果がある。魏志倭人伝や『日本書紀』の記事を参考にすれば、おそらく古代の日本列島でも、社会の上位にある者が亡くなると、彼または彼女の近親者は我が身を傷つけ、血を流して哭泣し、死者の再生を願う儀礼をおこない、抜歯のばあいは抜いた歯を死者に供えることがあったのであろう。しかし、縄文・弥生時代のばあい、哀悼抜歯は社会の上位者が死んだときであったのか、それとも近い関係にあった者が亡くなったときであったのか、あるいはもっと別の原理であったのかは、今後の議論を必要とする。

おわりに

哀悼抜歯は世界的な広がりをもつ習俗であって、世界中でこれまでに抜いてきた歯の数は莫大なものであろう。けれども、抜歯したあとの歯が遺跡から見つかった例は、きわめて少ない。日本でも、東北南部から中部地方の弥生時代に再葬墓関係の遺跡から抜いた歯が出てくるが、すべて死後に抜いた歯とその歯に孔をあけて作った装身具であって、生きていたときに抜いた歯は1本も含まない[春成, 1993: 62～65]。現状では、生前に抜いた歯であることがはっきりしているのは、

古墳時代の2例だけである。哀悼抜歯のばあいは、棺の中や周囲にのこっている可能性が高いので、今後、発掘のさいには、よりいっそうの注意を必要とする。

抜歯、傷面、截耳、火傷、断髪など哀悼傷身の習俗は、それが非常な苦痛を与え、明瞭な痕跡をのこすだけに半端なものでない。殉死にいたっては、死によって自己の、あるいは集団の意志をあらわすことになる。それだけに、この習俗を実行するにあたっては一定の基準がある一方、実行することによって哀悼者や遺族の立場に変化が生じることもあったろう。今回取り上げた哀悼抜歯は、ポリネシアと「プレーアレウト」を除くと、その頻度は数%から2, 30%でいどにとどまっている。誰が亡くなった時に抜歯したのか、考古学的には、墓地遺跡から出土した哀悼抜歯をおこなっている人物のばあいは、墓地の中での地位を調べることによって、哀悼抜歯の意義をよりいっそう明らかにすることができるだろう。

ヘリチカが調べたアメリカ、シベリア、モンゴルなどの抜歯人骨の多くは、埋葬状況が不明であって、首長に近い人たちであったのかどうか検討するすべがない。わずかにアレウトの抜歯が首長など身分的に上位の人であった可能性を示唆しているにすぎない。その点で、中国の三里河遺跡など中国新石器時代の墓地遺跡は、大型墓・中型墓・小型墓の階層的なちがいをもっているもので、その検討が可能であろう。哀悼傷身・殉死を死者と哀悼者の関係において追究することは、その社会の構成原理、葬送の観念をも解明していくことにもつながっていくのである。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、石田肇（琉球大学医学部）、小畑弘己、甲元眞之（以上、熊本大学文学部）、金関丈夫（帝塚山大学・故人）、小谷凱宣（名古屋大学大学院人間情報学）、佐原真、西本豊弘、千田嘉博（以上、国立歴史民俗博物館）、スチュアート ヘンリ（昭和女子大学大学院）、竹中正巳（鹿児島大学歯学部）、百々幸雄（東北大学医学部）、榑崎修一郎（群馬県立自然史博物館）、諏訪元・高橋雅子・西秋良宏（以上、東京大学総合研究博物館）、韓 康信（中国社会科学院考古研究所）、M. PIETRUSEWSKY（ハワイ、マノア大学）、T. D. STUART（スミソニアン研究所・国立自然史博物館・故人）、ハーヴァード大学ピーボディ博物館の諸氏の好意で、教示を得たり、入手困難な文献のコピーをいただいたり、抜歯の実例を調べたりすることができた。記して、感謝の意を表する。

(1999年3月29日)

註

(1)——スミソニアン研究所の国立自然史博物館に保管してあるヘリチカ収集の欠歯人骨を、私は1983年夏に、T. D. スチュアートの世話で2日間、手に取って見学する機会を得た。しかし、その時は抜歯であることを前提にしての観察であったために、自らの観察にもとづく証拠をたくさん示し、儀礼的抜歯であると主張できないのが残念である。ただ、印象にのこっていることは、残存している歯や歯槽骨の状態が、縄文時代の抜歯例とくらべて何の違和感ももたせず、意図しない歯の脱落ではな

いかと疑わせるような不自然さを示していなかったという点である。

(2)——東京大学総合博物館蔵のアイヌ頭骨の歯のかみ合わせを調査中に健康歯が欠除しているのに気づいた井上が不思議だといって、佐原真と筆者に写真を示し、意見を求めたので、風習的な抜歯であること、シベリア・アメリカの抜歯様式と共通することを指摘した。佐原の勧めで筆者と共同で研究することになったので、ヘリチカの論文などのコピーを送ったところ、井上は幸地とい

っしょに論文にまとめて一方的に発表したというのが井上らの論文の公表までの経緯である。

(3)——陰菌譚について、性交中に膣の「収縮作用が、(ペニスを……H)膣が嘔むという連想を起こさせ、膣痙攣から、「さらに膣に菌が生えているという幻想にまで発展」し、陰菌譚が発生した、と押鐘篤は説明している〔押鐘、1977〕。医学でいう「陰莖捕捉」つまり膣痙攣が起こりペニスを抜けなくなった状態が長く続くと、ペニスは壊死に陥ることがある、という。ペニスを噛み切った陰菌の話は、このようなことから生じたのではないかと、吉岡郁夫は述べている〔吉岡、1983：166～167〕。口淫のために邪魔な歯を除くという佝僂の俗説などを参考にして陰菌譚を解釈する金関丈夫の説〔金関、1976：253～259〕よりも、このほうが説得力があると思う。

(4)——「日本の哀悼傷身・断髪は、馬の殉死と結合しており、アルタイ系遊牧文化から系統を引き、かつ日本の大化前代の支配者層の葬制の特徴をなす」と大林太良は結論づけている〔大林、1970：284〕。日本で、古墳に馬の遺体を納めるのは5世紀後半からである〔松井・神谷、1994：87〕。大林の考えだと、日本の哀悼傷身は、5世紀後半に始まる習俗ということになり、4世紀後半の内容石棺墓の哀悼抜歯例との間に矛盾が生じる。

(5)——哀悼傷身のもっとも極端な表現は殉死であった。卑弥呼が亡くなったときの百余人の殉葬者は奴婢であったというから、強制された殉死であったのだろう。考古学的な証拠を欠くという理由で、この時代の殉葬、ましてや「百余人の殉葬」を否定する研究者が多い。たとえば、「考古学上の知識としては、五十人にせよ百人にせよ、それほど多数の人間を殉葬した墓は、中国にはありえても、日本では発見したことがないという事実を前面にだして、卑弥呼の塚に関する記事の全体を疑うことが可能になる」と小林行雄は述べ〔小林、1967：305〕、殉葬に否定的である。けれども、そのような論者も卑弥呼の存在は認めているのだから、これは一つの矛盾である。卑弥呼の墓の有力候補である奈良県箸墓古墳などを発掘調査して、殉葬の痕跡が何も見つからなかったというのであれば否定説もそれなりの根拠をもつことにもなる。しかし、そうではないのだから、「百余人の殉葬」の記事は簡単には否定できないはずである。

明智光秀が織田信長を本能寺で滅ぼしたとき、信長の

部下であった藤孝・忠興父子はその知らせを聞くと、ただちに髻を払って信長にたいする弔意をあらわした、という。このばあいは、髪を切ったことが、信長を思い、光秀の側につかないことの意志表示にもなった。尾張徳川家の義直が亡くなったときは9人の部下が切腹して殉死した。彼らの墓は義直の廟所に付属して造られた。それだけでなく、彼らの遺族は主人が亡くなったあとの生活を徳川家から保証され、彼らの家は由緒のある家として格上げされることになった。しかし、徳川四代將軍家綱のときに殉死を禁止する旨を命じたので、以後殉死は跡を絶った。

ところが、明治天皇が亡くなり1912年9月の大葬の日、陸軍大将の乃木希典はあとを追って妻とともに自殺した。乃木夫妻が殉死すると、一般国民の間からも、あとを追って自殺する者があらわれた。当時の新聞はこれを「偽乃木の続出」の見出しで報じ、乃木の「人格」と「功勳」があつてはじめて「衆口一致直に賞讃を博した」のであつて、余人がこれを模倣するのは「狂者の行動なり」と断じ、「甚だ憂ふ可し」としている〔『東京朝日新聞』1912.9.18付け〕。乃木の葬儀は盛大をきわめ、報道機関は口をそろえて乃木の忠義の心を讃えた。それに対して、文部省は自殺に言及することは避けて乃木を小中学校の修身の教材にするよう指示をした。乃木夫妻の自殺は、殉死を過去のものと考えていた知識人に精神的な打撃を与え、森鷗外は「阿部一族」(1913年1月)、夏目漱石は「こころ」(1914年4月～8月)を執筆し、あらためて殉死の意味を考えた。このような状況のもとで、乃木は「聖雄」、「軍神」として祭り上げられ、乃木が関係した那須、京都、函館、東京、長府、善通寺などの地に乃木神社が創建されることになった。殉死は亡くなった主人に対して死後にいたるまでの忠誠を誓うのであつたけれども、客観的には生きている人たちに対して自らの意志を見せしめず機会となつたのである。

大老堀田正盛が徳川將軍家光に、その子の佐倉藩当主正信が家綱に殉死した出来事を、松本清張は短編小説の「二代の殉死」(『週刊朝日別冊』時代小説特集号、1955年4月)で扱っている。「殉死は亡き主人に特に目をかけられた家来が願つてするのであるが、主従の恩愛よりも世間の思惑や批判を恐れての結果が多い。あれほど君寵を蒙りながら、故主のお供もせず生恥をさらしているといわれるのが何よりも辛いから死ぬ」という殉死の心理を紹介している。

文献

- 井上直彦・幸地省子 1987「近世アイヌにおける前歯の抜歯」『人類学雑誌』第95巻第3号, 305~324頁。
 —— 1990「近世アイヌにおける抜歯風習の終焉」『歯界展望』第76巻第5号, 1089~1104頁。
- 今道四方爾 1933「太田貝塚人々骨の人類学的研究」『人類学雑誌』第48巻第2号, 付録。
- 今村 豊 1935「楽浪王光墓発見人骨に就いて」『楽浪王光墓』古蹟調査報告第二, 63~68, 図版第95~99, 朝鮮古蹟研究会。
- 梅原末治 1960『蒙古ノイン・ウラ発見の遺物』東洋文庫論叢, 第27冊。
- エーリング, ヘルマン フォン 1882 (杉本茂春訳 1984~85)「歯の人工的変形 (第1回~最終回)」『えとのす』第24号, 154~158頁, 第25号, 136~142頁, 第26号, 149~154頁, 第27号, 147~153頁, 第29号, 150~154頁。
- 石川栄吉 1984『南太平洋物語』力富書房。
 —— 1985「人の死をどのように悼むか—ポリネシアの哀悼傷身について」(石川栄吉・岩田慶治・佐々木高明編)『生と死の人類学』343~368頁, 講談社。
 —— 1992『日本人のオセアニア発見』平凡社。
- 江上波夫 1940「南方支那民族の欠歯の風習に就いて」『人類学雑誌』第55巻第1号, 6~10頁。
 —— 1951「ユウラシア北方民族の葬礼における髑面, 截耳, 剪髪について」『ユウラシア北方文化の研究』144~157頁, 山川出版社。
 —— 1967「中国の中部・南部における欠歯の風習」『アジア文化史研究』論考篇, 169~177頁, 山川出版社。
- 榎 一雄 1941「ヘリチカ氏「シベリア及びアメリカに於ける前歯除抜の風習」」『東洋学報』第28巻第2号, 141~154頁。
- 大多和利明 1983「広田弥生人の所謂風習的抜歯, 特にその抜歯痕の研究」『九州歯学会雑誌』第37巻第3号, 588~600頁。
- 大林太良 1970「哀悼傷身の風俗について」『民族学からみた日本』岡正雄教授古稀記念論文集, 259~292頁, 河出書房新社。
 —— 1977『葬制の起源』角川選書, 92, 角川書店。
 —— 1987「哀悼傷身」(石川栄吉ほか編)『文化人類学事典』3~4頁, 弘文堂。
- 大和久震平編 1974『七廻り鏡塚古墳』大平町教育委員会。
- 押鐘 篤 1977『医師の性科学』学建書院。
- 笠原 浩・坂村吉保 1970「いわゆる“ゲバルト”による顎顔面外傷について」『口腔外科雑誌』第19巻, 885~891頁。
- 片山一道 1988「ポリネシアの人類誌」『日本民族・文化の形成』永井昌文教授退官記念論文集, 1, 95~113頁, 六興出版。
 —— 1991『ポリネシア人』同朋舎出版。
- 加藤九祚 1986『北東アジア民族学史の研究』恒文社。
- 金関丈夫 1940「Dentes vaginae 説話に就いて—東亜諸民族の欠歯風習に関する一考察—」『台湾医学会雑誌』第39巻第11号, 178~201頁。
 —— 1940「アイヌにも欠歯の風習はあったか」『民族文化』第2号, 1頁。
 —— 1956「沖永良部西原墓地採集の抜歯人骨」『民族学研究』第24巻第4号, 14~16頁。
 —— 1958「種子島長崎鼻遺跡出土人骨に見られる下顎骨中切歯の水平研歯例」『九州考古学』第3・4号, 1~3頁。
 —— 1975「死霊に対するカムフラージュ—抜歯の起り」『発掘から推理する』朝日選書40, 40~44頁, 朝日新聞社。
 —— 1976「Vagina Dentata」『木馬と石牛』角川選書81, 238~278頁, 角川書店。
- 木下尚子 1997「日本列島の風習的抜歯」『東アジアの文化構造』熊本大学「地域」研究Ⅱ, 3~33頁, 九州大学出版会。
 —— 1997「東アジアにおける風習的抜歯の基礎的研究 (資料編)」『先史学・考古学論究』Ⅱ, 熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集, 481~530頁, 龍田考古会。
 —— 1998「東亜貝珠文化考」第7回中琉歴史関係国際学術会議発表論文 (1999「東亜貝珠考」『先史学・考古学論究』Ⅲ, 315~354頁, 龍田考古会)。
- 清野謙次 1922「考古漫録」『民族と歴史』第8巻第6号, 41~49頁。

- 久保寺逸彦 1956「北海道アイヌの葬制—沙流川アイヌを中心として—」『民族学研究』第19巻第3-4号, 1~35頁, 第20巻第3-4号, 54~101頁。
- 古賀謙一郎 1968『蕃談』(池田 皓編)『漂流』日本庶民生活資料集成, 第5巻, 239~304頁, 三一書房。
- 甲元眞之 1995「中国先史時代の抜歯習俗」(古代オリエン特博物館編)『文明学原論』江上波夫先生米寿記念論集, 283~293頁, 山川出版社。
- 小金井良精 1935「アイノ人類学的調査の思ひ出一四十八年前の思ひ出一」『ドルメン』第4巻第7号, 54~65頁。
- 児玉作左衛門・伊藤昌一 1941「アイヌの髪容の研究」『北方文化研究報告』第5輯, 1~80頁。
- 小林行雄 1967『女王国の出現』国民の歴史, 1, 文英堂。
- 小松眞一 1922「北アジアにおける殉死の風習に就いて」『歴史と地理』第9巻第3号, 8~18頁。
- 島 五郎・鈴木 誠 1968「ハワイ諸島人の抜歯について」『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古稀記念論文集, 41~60頁, 平凡社。
- 杉本茂春 1973「抜歯の一方法とその源流」『日本歯科医史学会々誌』第1巻第1号, 11~17頁。
- 鈴木 尚 1940「人工的歯牙の変形」『人類学・先史学講座』第12巻, 1~51頁, 雄山閣。
- 1962「内谷組合式石棺内出土の人骨」『石井』徳島県文化財調査報告書, 第5集, 111~115頁, Pl. 1。
- 1963『日本人の骨』岩波新書, 青477, 岩波書店。
- 1983『骨から見た日本人のルーツ』岩波新書, 黄220, 岩波書店。
- ・尾本恵市 1974「七廻り鏡塚古墳人の遺体と頭髮」『七廻り鏡塚古墳』101~106頁, 大平町教育委員会。
- スチュアート ヘンリ 1987「アリュート民族のミイラ風習: 樺太アイヌのミイラと比較して」『北海道考古学』第23輯, 89~100頁。
- 竹花庄治 1968「処置と予後—補綴の立場から—」『歯界展望』第32巻第2号, 241~246頁。
- 知名定順・花城潤子・盛本 勲・阿利直治 1979「座間味村古座間味原出土の人骨について」『花綵』1, 43~49頁, 沖縄国際大学考古学研究会O.B.会。
- 戸出一郎 1977「中国に於ける欠歯の風習について」『日本歯科医史学会々誌』第5巻第1号, 50~57頁。
- 1978「打牙齧における欠歯の風習について」『日本歯科医史学会々誌』第5巻第4号, 11~17頁。
- 土肥直美・田中良之 1988「古墳時代の抜歯風習」『日本民族・文化の形成』永井昌文教授退官記念論文集, 1, 197~215頁, 六興出版。
- 服部良造・大島直行・埴原恒彦・百々幸雄 1996「北海道縄文時代人の風習的抜歯について」『考古学研究』第43巻第3号, 100~112頁。
- 原口正三 1973『高槻市史』第6巻, 考古編, 高槻市役所。
- 春成秀爾 1973~74「抜歯の意義(1)・(2)」『考古学研究』第20巻第2号, 25~48頁, 第3号, 41~58頁。
- 1979「縄文晩期の婚後居住規定」『岡山大学法文学部学術紀要』第40号(史学篇), 25~63頁。
- 1980「縄文中・後期の抜歯儀礼と居住規定」『古文化論攷』39~68頁, 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会。
- 1982「縄文社会論」『縄文文化の研究』8, 社会・文化, 224~252頁, 雄山閣。
- 1983a「抜歯」『考古遺跡・遺物地名表』423~429頁, 604~607頁, 柏書房。
- 1983b「抜歯習俗の成立」『季刊考古学』第5号, 61~67頁。
- 1986「抜歯」『弥生文化の研究』8, 祭と墓と装い, 79~90頁, 雄山閣。
- 1992「抜歯」(日本第四紀学会/小野 昭・春成秀爾・小田静夫編)『図解・日本の人類遺跡』102~103頁, 148~149頁, 東京大学出版会。
- 1993「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集, 47~91頁。
- 1997『古代の装い』歴史発掘4, 講談社。
- ハルヴァ ウノ 1938(田中克彦訳 1971)『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』三省堂。
- ヘロドトス 前430ごろ(松平千秋訳 1972)『歴史』上・中・下, 岩波文庫。
- 本多勝一・藤木高嶺 1963『カナダ・エスキモー』朝日新聞社。
- 松井 章・神谷正弘 1994「古代の朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺について」『考古学雑誌』第80巻第1号, 57~94頁。
- 峰 和治 1992「南九州および南西諸島における風習的抜歯」『南九州地域における原始・古代文化の諸様相に関する総合的研究』平成3年度教育研究学内特別経費研究成果報告書, 55~58頁, 鹿児島大学法文学部。
- 宮内悦蔵 1940「所謂台湾蕃族の身体変工」『人類学・先史学講座』第19巻, 1~45頁, 雄山閣。
- 宮川 渉 1974「於古墳出土の歯牙について」『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報

- 告, 第29冊, 150~156頁。
- 三宅宗悦 1943「大隅国徳之島喜念原始墓出土貝製品及び出土人骨の抜歯に就て」『考古学雑誌』第33巻第10号, 1~10頁。
- 山内清男 1937「日本先史時代に於ける抜歯風習の系統」『先史考古学』第1巻第2号, 53~60頁。
- 吉岡郁夫・武藤 浩 1983『性的人类学』共立出版。
- レヴィ・ブリュル 1910 (山田吉彦訳 1953)『未開社会の思惟』上・下, 岩波文庫, 岩波書店。
- 韓 康信 1982「亳県富庄新石器時代墓葬人骨の観察」『安徽省考古学会会刊』6, 18~20頁。
 —— 1983「対「古代的鑿齒民」一文の幾点資料補充」『江漢考古』1983—1, 70~71頁。
 ——・潘 其風 1981「我国拔牙習俗源流意義」『考古』1981—1, 64~76頁。
- 張 振標 1981「古代的鑿齒民」『江漢考古』1981—1, 65~69頁。
- 連 照美 1987「台湾史前時代抜歯習俗之研究」『文史哲學報』第35期, 227~254頁, 国立台湾大学文学院。
- BALIKCI, Asen, 1931, *The Netslik Eskimos*. (reprinted) 1970, Natural History Press.
- BRIGGS, L. Cabot, 1955, The Stone Age Races of Northwest Africa. *American School of Research Peabody Museum, Harvard University*, Bull. No. 18, pp. 82~87.
- CAMPBELL, Alastair H., 1981, Tooth Avulsion Victorian Aboriginal Skulls. *Archaeology in Oceania*, Vol. 16, pp. 116~118.
- CHAPPEL, H.G., 1927, Jaws and Teeth of Ancient Hawaiians. *Memoirs of the Bernice P. Bishop Museum*, Vol. 9, No. 3, pp.1~18.
- COOK, Della Collins, 1981, Koniag Eskimo Tooth Ablation: Was Hrdlička Right After All?. *Current Anthropology*, Vol. 22, No.2, 159~163.
- ELLIS, William, 1839, *Polynesian Researches* 4vols. London, new edition, 1969, Polynesia, Tokyo.
- HAN, Kangxin and NAKAHASHI, Takahiro, 1996, A Comparative Study of Ritual Tooth Ablation in Ancient China and Japan. *Anthropological Science*, Vol. 104, No.1, pp. 43~64.
- HARUNARI, Hideji, 1986, Rules of Residence in the Jomon Period, Based on the Analysis of Tooth Extraction. *Windows on the Japanese Past: Studies in Archaeology and Prehistory*, Center for Japanese Studies, University of Michigan, pp. 293~310.
- HASEBE, Kotondo, 1925, Über die Zahnverstümmelungsformen bei den Steinzeitmenschen Japans. *Arbeiten aus dem Anatomischen Institut der Kaiserlich Japanischen Universität zu Sendai*. Heft X 1, pp. 61~106.
- HRDLIČKA, Ales, 1940, Ritual ablation of front teeth in Siberia and America. *Smithsonian Miscellaneous Collections*, Vol. 99, No.3, pp.1~37.
 —— 1941, Exploration of Mummy Caves in the Aleutian Islands. *The Scientific Monthly*, Jan. 1941, pp. 5~23, Feb. 1941, pp. 113~130.
 —— 1942, Crania of Siberia. *American Journal of Physical Anthropology*, Vol. 29, No. 4, pp. 435~481.
- IKEDA, Jiro and HAYAMA Sugio, 1982, The Hadza and Iraqw in Northern Tanzania: Dermatographical, Anthropometrical, Odontometrical and Osteological Approaches. *African Study Monographs*, No. 2, pp. 1~26.
- INOUE, Naohiko, SAKASITA, Reiko, NOZAKI, Tadashige and KAMEGAI, Tetsuya, 1992, A Preliminary Report on Ritual Ablation of Anterior Teeth in Modern Kenyan. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, Vol. 100, No. 1, pp. 119~123.
- KANASEKI, Takeo, 1960, The custom of teeth extraction in ancient China. *Extrait des Actes du VIe Congres International des Sciences Anthropologiques et Ethnologiques Paris 1960*, Tome 1, pp. 201~205.
 —— 1962, Note on the skeletal materials collected during the Ryukyu survey 1960. *Asian Perspectives*, Vol. 6, No. 1-2, pp. 139~144, pl.VII~X.
- MACINTOSH, N.W.G., 1971, Analysis of an Aboriginal Skeleton and a Pierced Tooth Necklace from Lake Nitchie, Australia. *Anthropologie*, Vol. IX, No. 1, pp. 49~62.
- MILNER George R. and LARSEN, Clark S., 1991, Teeth as Artifacts of Human Behavior: Intentional Mutilation and Accidental Modification. *Advances in Dental Anthropology*, pp. 357~378, Wiley—Liss Inc.
- MERBS, Charles F., 1968, Anterior tooth loss in arctic population. *Southwestern Journal of Anthropology*, Vol. 24, No. 1, pp. 20~32.

-
- LARSEN, Clark Spencer, 1997, *Bioarchaeology, Interpreting behavior from the human skeleton*. Cambridge University Press.
- NAKHASHI, Takahiro, 1995, Ritual Tooth-Ablation in Weidun Neolithic People. Studies on the Human Skeletal Remains from Jiangnan, China. *National Science Museum Monographs*, No. 10, pp. 96~98, Tokyo.
- PIETRUSEWSKY, Michael and DOUGLAS, Michele T., 1993, Tooth Ablation in Old Hawaii. *The Journal of the Polynesian Society*, Vol. 102, No. 3, pp. 255~272.
- POUNDER, Derrick, 1983, Tooth extraction and oral sex, *The American Journal of Forensic Medicine and Pathology*, Vol. 4, No. 1, p. 96.
- 1984, Forensic aspects of Aboriginal skeletal remains in Australia. *The American Journal of Forensic Medicine and Pathology*, Vol. 5, No. 1, pp. 41~52.
- ROBB, John, 1997, Intentional tooth removal in Neolithic Italian women. *Antiquity*, Vol. 71, pp. 659~669.
- SINGER, R., 1953, Artificial deformation of teeth: A preliminary report. *South African Journal of Science*, 50, pp. 116~122.
- SMITH, Patricia, 1991, The Dental Evidence for Nutritional Status in the Natufians, (ed. BAR-YOSEF, O. and VALLA, F. R.) *The Natufian Culture in the Levant*. International Monographs in Prehistory, Michigan.
- SUZUKI, Hisashi and HANIHARA, Kazuro (ed.), 1982, The Minatogawa Man. *The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin*, No. 19.

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

(1999年5月7日 審査終了受理)

The Tooth Extraction for Mourning: Custom Connecting Asia, North America and Polynesia

HARUNARI Hideji

Tooth extraction is one custom of self-impairment expressing lament. One famous example of this is in the Hawaiian Islands from the 18th to the 19th century. The teeth extracted were the central and/or lateral incisors of both/either jaw(s). At the death of a head man or a family member, two teeth were extracted at one time to express the deep mourning. The oldest written document is the example of Gelao tribe which resided in Sichuan and Guizhou provinces in the south-west of China from the 16th to the 18th century. However, archaeological evidence shows that this custom goes back as early as the 4th century; the male human bones from Uchi-tani stone coffin tomb in Tokushima prefecture in Japan are accompanied with a female central incisor of the upper jaw. This must be evidence of the practice of lamenting tooth extraction.

Tooth extraction in the Chinese Neolithic began about 7000 years ago with extraction of the both lateral incisors of the upper jaw. Judging from the ages and the high percentages of extraction, it may well relate to a coming of age ceremony. In China, this custom became outmoded around 4500 years ago. It started again in and around Anhui, Jiangsu and Shandong provinces. This time the teeth extracted were the central and/or lateral incisors of both/either jaw(s) at higher ages and lower percentage. The present writer assumes that this tooth extraction was for expressing lament.

The tooth extraction of the incisors of both/either jaw(s) is known in Mongolia (~19th c.?), Siberia (the Neolithic~19th c.?), North America (before 16th c.~19th c.?), Japan (the early Jomon period~6th c.=the period of ancient burial mounds), Ryukyu (the late Jomon period~13th c.), Polynesia (18th~19th c.). These examples indicate that the lamenting tooth extraction which began in China in the Neolithic, spread through Asia, North America, and the Pacific over thousands of years.

In Polynesia, Siberia, and Mongolia, the lamenting self-impairment played part in expressing and renewing the special close relation with a headman or a family member. It is quite possible that if we study the contents and sex of the deceased in tombs, the archaeological evidence will provide us some hints on the social positions of the tooth extracted persons, and provide insights to the social structure itself.